

内田成金とを比較したのは、つまり彼も、一寸見ると、普段は取すましたり、洒落のめし
たりして、中々體裁を張つてゐるが、一旦緩急ある時には、苦もなく本音を吐いてしまひ
さうなところがあると思はれたからである。但、思はれるだけであつて、僕は何もそんな
ところを見たことがある譯でもなし、又これは別に谷崎精二だけに當嵌めらるべき話でも
なさうだから、その上間違つてゐるでもしたら、彼及び讀者に重々お詫する次第である。

(八〇八)

江 口 渙

僕は二十五歳の夏、東京本郷區役所で、長年猶豫して貰つてゐた徴兵検査を受けたのだ
が、不幸にして丁種で不合格となつた、その日のことである。その頃はまだ僕の頭も今日
のやうに禿けてゐるどころか、普通よりは縮れてこそゐたれ多い髪の毛を長い目に延ばし
て分けてなぞゐたので、見渡す限り坊主頭の、頑健な體格者等の中に伍して、まるで愛國
婦人會に藝者か女郎でも出席したやうに、少なからぬ肩身の狭い思をして、隅つこの方に
小さくなつてゐた、その時のことである。壯丁等が禪一つの素裸になつて、廣間の半分ほ
どを占めてごたくと思ひ思ひに坐つてゐると、廣間の他の半分の側には、軍服を着た檢
査官や、羽織袴の役人たちが、鹿爪らしい顔をして立つてゐて、その中の一人の軍服が帳
面を片手にして壯丁の姓名を順番に呼んでゐた。壯丁等は各々自分の名を呼ばれると、返

辭をすると共に起立するのであつたが、大抵の者は「ハイ、」と顔や體格に似合はぬ小さな聲を出して、壊れた人形を引きずり起す時のやうな、要領の悪い起立の立ち方をするので、「もつと活潑に！」とか、「朝飯を食つてないのか？」とか、又時に依ると、「もう一遍返辭をし直せ、」とか、「元へ！　もう一度起立！」などとやり直させられてゐた。それにも拘らず、隅つこの方で、友だちもなく、と言つて知らぬ人と言葉を交す方法を心得ない僕が、見てゐたところに依ると、一向壯丁たちの意氣は奮ひ立たなかつた。

ところが！　その時例の片手に帳面を持つてゐた軍服が、

「江口渙！」と呼び上げた聲の下に、

「ハア——イ！」と廣間中はおろか、可成り廣い區役所中の、あるだけの部屋にも響き渡つたかと思へるやうな、大きな、確に蠻聲といふ種類のを張り上げて、ひよこつと立ち上つた巨漢があつた。それに、彼のその時の立ち上り方が又、實はいつ何時でも立ち上れるやうに、兩足の爪尖を立て、膝だけ丸突いて、坐つてゐるやうな恰好をしながら、手ぐ

すね引いて待つてゐたのだらうと思はれた程、例へば玩具のびつくり箱の蓋を開けた時、ゼンマイ仕掛で飛び上る人形よろしくの體で、飛び上つたやうに見えたのであつた。

この突飛な男の言行に、無論場中の壯丁等がどつと笑つたのは言ふ迄もないが、検査官や役人たちまで叱る言葉が出ないうちに笑つてしまつた。僕はその時、既に「スバル」「新小説」などに二三の小説を發表してゐた、この未來の大家の名を知つてゐたので、僕も亦笑ひながらだが、殊更注意してその方を見た。その時の印象は、雲突くやうな大男で、彼自身が又、自分のやつたことが餘り反響があり過ぎたのに驚いたのか、口元には白い齒を見せて笑を浮べながら、目付は、そのぎよろりとした目を十分に開いて、叱られはしないかな？　といふやうな危惧の表情をしてゐた、しかし大體に於いて、よく御寺の境内にある五百羅漢の中のどれか一人が、人間に化けて現れたやうな、だが快漢に違ひない、人相と覚え込んだ。

その年の秋に、僕はある友達に連れられて、始めて江口渙と初對面の名乗を上げたので

あつた。初對面の挨拶と共に僕は彼の一目恐ろしく見える顔は、特にその物凄いい目付は、よく見ると、無邪氣な、寧ろ可愛らしいものであることを發見した。多分、その日から早速僕たちは「君、僕、さうか、行かう、」で物を言つたやうに思ふ、まるで、中學生が學校の庭で知り合ひになつたやうに、初對面の日から忽にして親友になつた譯であつた。

だから、それから一ヶ月ほど後にこんな事があつた。——或晩、彼と會つた時、「どこか女の家で遊びに行くところはないか？」と彼が言ひ出して、僕は自分に心當りはないが、當時やつぱり本郷に下宿してゐた鍋井克之のそこへ行つたら、何か面白いことがあるだらうといふので二人で彼を訪れたところが、彼がゐなかつた。そこで、僕はふと、その四五日前に、克之がT——といふ、やはりその近邊に住んでゐる、車宿の娘で、展覽會の看守で、文學が好きで、中々別嬪の娘に紹介してくれることになつて、彼女を訪問に克之と出かけたところが、途で偶然に彼女に遇つてしまつたので、さすがの彼も大いにあわて、僕を紹介するどころか、「やあ暫く、ちつと遊びに来ませんか、僕のところへも入らつしやい、」な

ぞとしどろもどろな事を言つて、呆氣なく別れてしまつたことがあつた、といふことを思ひ出して其の事を換に話すと、彼は言下に、「ぢやあ、その女を訪問しよう、」と叫んだ。

その彼の調子に、僕は「だが……」といふやうな、逡巡の様子を見せると、如何にも中學生らしい氣分で意氣地ない氣がしたので、「行かう、」と僕も夢中で答へた。だが、愈よその家の前に來て見ると、幸ひ車はみな出拂つたと見えて、車夫らしい者は一人もゐなかつたが、見るからに車宿のお神らしい、そのT——といふ娘の母親らしい女が、二人の子供を寢かしてある煎餅蒲の枕元で、一人の赤ン坊を抱いて、往來から見える所に坐つてゐるのを見ると、僕は辟易してしまつた。その僕を、勵ますやうに、「どうしたんだ、どうしたんだ？」と二三度も僕のお尻を押して促がしてゐた換は、忽まどろしくなつたと見えて、つか／＼とその家に入つて行つて、「T——さん、娘さんは、留守ですか？」と短兵急に聞いたものだ。僕は少なからず彼の元氣に驚かされた。だが、生憎尋ねる當人がゐなかつたので、僕たちは又々途方に暮れねばならなかつた。

「もう外にないか？」と彼は促し立てた。

「さうだな、この近くに……」と僕は考へてゐるうちに、ふと思ひ出して、「僕の友達の所へよく来る女で、僕も二三度會つたことがあるが、なか／＼別嬪だよ、十七ぐらゐで、元洋食屋にゐたんださうだが、その家の主人が叔父さんに當るとかでね、それが近頃墮落して、根津か、多分根津だが、ひよつとしたら白山の方かの、淫賣屋にゐると言ふんだが、そいつを訪問して見ようか？」

「行かう！」と僕は又大いに元氣を回復したが、二人の財布を調べて合はして見ると、五十錢にも足りなかつた。が、その女さへるれば、費用は彼女に負擔させよう、なぞと蟲のいゝ相談を決めて、又歩き出した。その頃の根津のそれ等の家は、丁度その頃の淺草六區のそれ等と同じで、各々そこにゐるだけの女たちが店頭に並んでゐて、道を通る男を見かけると遠慮なく呼びかけた。無論、大抵のさういふ家は一寸した路次にあつたが、その代り三軒ぐらゐ軒を並べてゐるところも珍しくなかつた。道を通つてゐてさへ呼ぶのだから

わざ／＼用事もない路次を入つたり、のみならず僕たちは一人の女を尋ねるものだから丁寧に一軒一軒のぞいて行く譯で、僕たちの姿を見ると、女たちは一勢に立ち上つて袖を引きに来る、僕は二三軒廻るうちに可成り閉口してしまつた。ところが、僕は中々へこたれて見えない。のみならず、いつの間にか、ためらふ僕の先頭に立つて彼は一軒一軒あの恐い顔をそれ等の家にのぞき込ましては、恐ろ氣づいてびく／＼してゐる僕に、

「どうだ、こゝにもゐないか？」と尋ねるのである。

僕は彼の袖の蔭に隠れるやうにして、半分首を延ばしながら碌に女たちの顔を見ないで、「いや、ゐない、ゐない……」と答へたものである。

そして、根津何十軒かの銘酒屋をやつとのことで済ますと、

「白山の方には多分ゐないよ、」と弱音を吐く僕に頓着なく、彼は又白山に僕を連れて行つた。僕が案内するのか、彼が案内するのか、主客顛倒の有様で、それから僕たちは又白山の何十軒といふそれ等の家を、一軒づゝのぞいて廻つた。もう僕は女を尋ねるといふやう

な気が失せて、まるで敵討の驍を探す手引をしてゐるやうな感じがした位である。

「どうだ、どうだ、ゐないか？」と言つて、彼が威勢よく暖簾をかき上げて見廻すのについて、恐る恐る彼の袖の蔭から、形ばかり一寸手を延して同じく暖簾をかき上げながら、中を見廻す眞似をする僕を、睨み付けるやうな目で見た彼の様子は、もう何年前のことだか、それは彼もまだ獨身の頃だつた、僕は未だに獨身だが、僕は中學生時代の腕白と共に、今でもはつきりと覚えてゐる。

結論——彼は今やその腕白を、やり場に困つて文學の方にその鋒先を向けてゐるのか？なる程そんなところもあるが、あれで又並々ならぬ才人であることを、さうだといつて、見逃すべからず。

(九・十)

野 依 秀 一

たしか明治四十二年のこと、私は中學を卒業して、これから先どうしようかと思案に暮れてゐた。それに引きかへ、私の同級だつた友達にH——といふ商人の息子があつて、彼はもう別に上の學校へ這入つても這入らなくてもいい、どうせ親爺の商賣の後を繼ぐんだから、兎に角道樂に高等商業だけ出ておくんだと言つてしやあくとしてゐた。實は私も親類の者たちが、文學などといふものは飯を食ふ役には立たぬ、是非その爲には高等商業に這入れ、と頻りに訓誡されたのだが、私はどうもそれが厭で、どんなにしてもせめて純文學がやれなくても、筆を以てする仕事をしたい、どうしたものだらうと思案に暮れてゐた最中だつた。

その時友達のH——は私の煩悶を聞いて、

「雑誌記者だつて、やつぱり人物がしつかりしてなくては駄目だね、引込思案の者や神経質の者は駄目だよ、大膽でなければ……」と私を誡めるやうに言ふのである、つまり私のやうな引込思案の、神経質な、小膽ものでは、とても文筆の士にもなれない、と暗に私を輕蔑して言つたのである。但しこの男はやつぱり文學といへば、まさか小説を書くやうな事ではなく、そんなものを書くだけで飯の食へる筈がない、つまり筆を握つて新聞なり雑誌なりを經營することである、と解してゐたのであらう。

「僕だつて君、」と私は少し癢に觸つたので、實際はさう言ひ放つ腹の中は通じ藥をかけた後ほどに勢がなかつたのだが、斯う言つた。

「なアに、僕だつていざとなれば大いにやるよ。」

するとH——は「君、野依秀一といふ人を知つてゐるか、」と君なんか駄目だよ、と言はぬばかりに言ひ返すのであつた。が、不都合にも私はその時野依秀一といふ名前を知らなかつたので、知らないと言へると、彼は「實業之世界」といふ雑誌をもつて來て、如何に野

依秀一が二十何歳の若年で而も四尺何寸かしかない小さな體を持ちながら、大隈伯爵とか、澁澤男爵とかを向ふに廻して、いつどこでどんな風な問答をして彼等に舌を卷かし、いつどこでどんな立派な演説をして群集を驚嘆させたか、そして「實業之世界」といふ雑誌はこれ迄一向ふるはない雑誌であつたが、一度彼が入社してその奇抜な論文を掲載し出すと共に、發行部數が何倍になつたか、等、等、といふやうな話をして私を驚かした。Hは——野依秀一をひどく崇拜してゐるらしく、そして一つには私を輕蔑する材料として一層彼を英雄化して話したのである。

それを聞くと、私はやつぱり腹を立てたが、今度は先のやうに「僕だつて、」とか、何とか口先だけでも對抗する勇氣さへ失つてしまつた。連も、幾ら空威張だけにしても、私には大隈伯や澁澤男を向ふに廻して議論することゝか、何萬の群集の前に立つて演説することなど、思ひも及ばぬ話だからである。そこで私は見事に降参して、「えらい人があるもんだね、二十幾つで社長で、而も五尺に足りない小男で……」などと言ひながら、勝誇つた友

達が色々を出して見せてくれる「實業之世界」の口繪の、野依秀一の寫眞にのぞき込んだものである。が、それは先にも言つたやうに、今から十年も前の話。

二三ヶ月前、私は始めてその同じ野依秀一と初對面の挨拶をした。私は彼が十年前と同じく實業之世界社長であり、十年前にその雑誌の口繪で見たのと同じ顔をしてゐるのを發見した。その記者が彼に私を引き合はすと、彼は可愛らしい、快活な顔をして、「やア、さうですか、私、野依です。どうぞ宜しく御願ひ申します。」と「やア、」と言ふ言葉から、「す」と言ふ最後の言葉まで、悉く少なくとも十間四方に聞える程の明らかな聲で言ひ放つた、だから、私の挨拶の言葉などは一言一句も聞えなかつた、實は私は言つても駄目だと思つたので、何にも言はず二三度びよこくと頭を下けただけであつた。そして彼はそれ等の言葉を言ひ終ると、その次の瞬間には、丁度クルクルと幕が上がつて幕が下つた後のやうに、けろりとして外の事を考へてゐるらしかつた。それに引かへて、私は挨拶の言葉こそ省略したが、それが濟んでから三分間も五分間も、彼の歩いて來た恰好、お辭儀の仕

方、物の言ひ方、顔の笑はせ方、等、等、と鼻氣に取られてほんやりと考へてゐた、なる程、彼はこの調子で乞食にも、大隈伯にも、澁澤男にも、應待するのに違ひない、などと考へた。そしてそれ等の態度も恐らく十年前、僕が友達から彼の名を始めて聞いた時分とちつとも變つてゐないに違ひないと考へられる。十年前に友達の口を通じて聞いて驚かされたやうに、なる程この人は決して引込思案の人などではなく、中々しつかりした人に違ひない、といふことを確めた。

だが、唯一つ、十年前と私が變つて彼に就いて考へられたことは、この人が決して所謂大膽不敵といふやうな人物ではないこと、のみならず中々小心な人らしいこと、それから随分神經質らしい、といふことであつた。そんなら何處がどんなに小心で、どんなに神經質かと聞かれたら、私は少しもその例を擧げることが出來ない、唯一度一寸會つて別れた切りなのであるから、が、私にはさういふ氣がしてならぬのである。そして變に哲學者見たいな事を言ふが、どんな大隈伯や澁澤男などと縦横に會談の出來る人でも、そんな事は

夢にも出来ない人でも、その違ひはほんの一寸した違ひで、さう人間には鬼の子とか佛の子とか言ふ程の違ひはないものである、と私は始めて野依秀一を親しく見て安心したことである。

彼が今度新しい、自分の名を冠した雑誌を出すといふことを聞いて、ふと思ひ浮んだことを一言。——そして、今度の雑誌も、亦、十年前のやうに、どんく／＼賣れて、私の友達のH——を驚かすやうになることを私は心から祈るものである。(九・三)

——『野依雑誌』創刊號に——

廣津和郎

大體、何某の印象などといふものは、その人に就いて極僅知つてゐる方が、多少間違へた事や片手落な事を書いても、斯ういふ場合、編輯者や讀者たちを満兄させ得る文章が出来るに違ひない。すると、僕は廣津和郎とは餘りに親しく附合つてゐるので、この際この文章を書くべく編輯者のお見出しに預かつた僕だが、多分餘り面白い答が出来ないに違ひない事を、豫めお断りしておく。

ひよつとすると、僕の近年に於いて、僕が他人の顔を見た度数は、ひよつとするとではない、確に彼の顔の数が一番多い。だから、僕が彼の印象を書かうとすると、あれも書かうこれも記さう、あれを言へばこれも話さないと片手落になるといつた風に、何々の印象とでもいふ未來派の畫見たいになりさうだ。單純なかと思ふと複雑な、素直で、意地張

で、馬鹿々々しい程正直で、偏狭で、かと思ふと無暗に寛大で、出鱈目な様で凝り性で、正義派で、お坊ちやんらしくて、苦勞人らしくて、(これだけ並べたら、どれか當るだらうといふのではなく、これだけが皆彼にあるのだ)随分一筋縄や二筋縄では行かない、僕にとつては、中々印象の書きにくい男である。

丁度近所同志の子供が、毎日夜が明けると「何々ちゃん遊ばう」と言つて、どつちかから誘ひ出して、何するとなく遊ぶ様に、僕は彼と一ヶ月も或は二ヶ月もつゞけて、殆每晚ほどぶら／＼と町を散歩する事が珍らしくない。そして歩き疲れると、二人で彼方此方のカフエーなどに二時間も三時間も、或は五時間も腰を下す、そして何をしてゐるかといふと二人で出鱈目な雑談ばかりしてゐる。(若し用事があつて彼と會つた時でも、彼に用事の言葉は二言か三言以上要しなかつた。彼は僕の知つてゐる限では、珍らしく物分のいい、頭のいい男である。)そんな時彼は随分お喋りになる。始めての人を呆然とさせるほど喋る。

トルストイとトゥルゲエネフとが野道を歩いてゐた時、前者が路傍の馬を見て、餘りに精

細にその馬の心持とかを話したといふので後者が驚いて、「お、お前の先祖には馬があつたに違ひない、」とか言つたといふ話がある。廣津和郎も、時々、或ひは僕と町を散歩しながら雑談してゐる時、或ひは僕と膝を對してお喋りしてゐる時、彼は冗談にだが、それに類した事をやつて、一頻り喋つておいてから「何だ馬鹿々々しい」とか「あ、つまらない、」とか言ひ捨て、一笑に附してしまふことがある。しかし、その彼の冗談のお喋りの中に「トゥルゲエネフなら、」お、お前の先祖は犬であつたに違ひない」とか、「藝者がゐたであらう、」とか、「番頭があつたに違ひない、」とか、「石であつたに過ひない、」と驚かせる様な事を言ふ。實は僕も時々驚くのである。

それでゐて、いつでも廣津和郎の小説を讀んで、反對に又僕が驚くことは、彼の小説に出て來る人物が、それが教養ある青年でも、惡黨らしい桂庵でも、無教育な賣春婦でも、彼等が皆そろひもそろつて單純で、呆れる程、今の世に稀な正直者であることである。最近の彼の小説「二人の不幸者」に就いて、それを批評した數人の批評家の間に、大分あの人

物等が果して不幸者であるか、どうか、俺にはさうは思へないなどといふ議論があつた様だが、あれなども、それは兎に角、つまり誰かと言つた通り、「二人或は數人の正直者」の話である。

昨年暮だつたか、或晩廣津ともう一人誰だつたかと、僕と三人で銀座を散歩した事があつたが、彼がそのもう一人の誰だかとかに就いて熱心に論じながら歩いてゐた間に、（一體誰でも少し頭のいい人間にとつて、分り切つた事をむきになつて論じ合ふ程面倒くさい事はない。その時彼等が分り切つた事を論じ合つてゐたのか、どうだか知らないが。）だから、頭の悪くない彼は、どうかすると、相手に暴慢だと思はせる程、話の最中にぶいと高飛車に出る事がある、かと思ふと、大真面目になつて（或は低能兒を教へる小學教師の様に、或は討論する中學生の様に、幾時間でも幾時間でも、相手とゆがみ合ふ迄論じてゐる事がある。その晩もどちらかと言ふと、後者の場合であつたらしい。）彼等から少し離れて歩いてゐた僕は、ふと路上で金と赤銅とをなひませにした一本の時計の鎖を拾つたの

で、「おい」と言つて、彼等の議論を切り上げさせるつもりで、「こんなものを拾つたよ」とそれを彼に示すと、彼は言下に「それは届けなければいけない」と言ひながら、それを手にとつて見てゐた。よく見るとそれは針金を赤銅色に染めた、而も半分に千切れた時計の鎖の一片であつた。「しかし、届けなければいけないよ」と彼は又言つて、それを僕の手に戻してしまふと、再び僕の傍を離れて、もう一人の誰かとの先の議論をつけた。僕は火變なものを拾つたと思つた。何故と言つて「こんなものをわざ／＼、馬鹿々々しい、届けられるものか」と抗辯する事が出来ない程「届けなければいけない」と言つた彼の言葉の調子が強かつたからだ。僕は彼が尙もくり返し「それは届けなければいけない」と言ふかと思つて針金の鎖を握つたまゝ、ひどく當惑した。しかし、それから彼がその事は忘れてしまつた様に、何にも言はないで先の議論をつゞけて行つてくれたので、僕はやつと少し安心して、彼の知らぬ間にそつとその拾つたものを又道に捨て、更に一層胸を撫で下したことであつた。

その翌日の晩も僕は彼と二人で銀座を散歩したが、その晩彼が鎌倉の家へ歸るといふので、新橋際で何が買物をしてゐた間に、彼を持ちながら路傍に立つてゐた僕は、ふと自分の前に十錢銀貨が落ちてゐるのを見出した。それを拾ひ上げてゐる所へ、丁度買物を了へて彼が僕の傍に歸つて來たので、見せると、彼はその前の晩と全じ調子で、「それを届けなければいけない、」と言つた。僕はその前の鎖の事があるので、「しまつた、」と思つた。彼が乗る汽車の時間を確かめるために、すぐ新橋際の交番の時計を二人でのぞいた時などは、今にも、「君、先のやつを届け給へ、」と言はれるかと思つて、僕は内心ひどく恐縮した。が、その時もそれきり、外の事にまぎれたのか、彼はそれに就いて何も言はなかつた。拾つた金はたとへ一錢でもそれを使はずに袂に入れておくと、縁喜がいゝと誰かに嘗て教へられた事を思ひ出して、その時は僕はいまだに捨てずに袂に入れたまゝである。

さつき僕は彼の事を、色々と並べて、一筋縄や二筋縄では行かないと言つたが、根を洗へば、僕の見るところでは、彼は正直者で、正義派で、さうして道徳家で、苦勞性で、お坊ちやんで、凝り性で、等、等、等、そして、それ等の反對のものや、別のものやを後天的か先天的かに併せ持つてゐて、例へば人がよく「誰某は斯々の無茶な事をした」などと話すと、彼は屹度笑ひながら、冗談の様にだが、「あゝ、それも分る」とか、「俺もやりさうだ」だとか言つて、大抵の場合所謂人の非行や缺點などと言ふものに同情し、それ等を理解することなどである。

生田長江が或時の座談に、彼に面と向つて、しかし多分お世辭ではなく、「君は餘り批評の仕方が手酷しい。が、藝術の眞實を君ほど鋭く見抜く人はない、」といふ意味の事を言つたのを聞いた事がある。僕もお世辭ではなく、その言葉には全然同感である。が又僕は人を信ずること彼の如く厚い男を見た事がない。俗に言ふ「買被る」といふ言葉通りになる程彼は人を善意に解釋するのが癖である。

編輯者の註文の中に彼の趣味に就いてとあつた事を思出したので、追記しておくが、これは餘り一般に知られてゐない彼の技能として、彼が油畫をかく事を紹介しておかう。

もつともそれは、彼の言ふところに依ると、二三枚しか描いたことがないさうだが、僕が見たその一枚の出来ばえに依ると、彼は十分にそれに於いて新しい洋畫家たるだけの素質のある事を示してゐる。それと共に、今の文學者の中では可成に洋畫を見るの目をも彼は持つてゐる者の一人に違ひない。音樂を聞く耳をも彼は十分に持つてゐるやうである。但し今彼が好んで聞きに行くのは淨瑠璃と洋樂を時々ぐらゐるものだが、その始め、今から三四年前の事だが、僕が彼に義太夫を聞きに行かうと勧誘した時は、中々應じなかつたものであつた。今でも芝居は彼がひどく嫌ふところのものである。然し、僕の見るところでは芝居だつて、(その外の何であらうが)少し見、聞き、馴れると、彼は直それが好きになつて、そして忽ち相當な劇評家の言ふ事ぐらゐるは言ふに違ひない。

要するに、(變なものを書いてしまつたが)僕は彼に可成り接近してゐる友達の一人として、彼が飯を食ふ所も、便所に行く所も、枕を外して寢てゐる所も、言ひ換へると彼の日常生活を十分見聞してゐる者であるが、一見して輕蔑してしまつても、餘り後になつて聞

違つてゐなかつた事を發見する或種の文學者に比べて、これ程接近してゐながら、僕は彼をどうしても馬鹿に出来ない男の一人だと感心してゐる。(八・二)

舟木重信

舟木重信といふとさしづめ平敦盛、明智重次郎などといふ芝居の人物の感じがする。若々しくて無垢でそして何處となく花なら蓄といふ感じた、いゝ感じである、恐らく僕などはその反対の感じを人に、殊に顔を知らない讀者等に、與へてゐることであらう。ところが、彼と僕とは年に於いては僅二歳ちがひで、文壇の末席を汚した順序から言ふと、彼の方が一日の早さがある位なのである、そして彼と僕とは中々親友なのである。

多分僕だつて、知つてゐる人は知つてゐるだらう、圖々しいどころか、人一倍臆病者の方で、初心なところが十分あるのだ。それと同じやうに彼もあれでどうしてどうして、敦盛や重次郎のやうに唯綺麗なばかりで、ぱツとしてゐるだけで、暗々と首を取られたり、負傷したりするやうなへまなことをする人ではない、十二分に物分りのいゝ人で、清濁併

せ飲まない迄も、併せ許す位の雅量を十分持つてゐる人である。さうでなければ、僕はこれでも可成り人見知りをする方なのに、まして彼とは交際まだ日も浅いに拘らず、こんなに自由な、こんなにくつろいだ氣持で、彼に對し得る筈がない、と思つて、時々さう思つて蔭ながら大いに尊敬してゐることである。

察するところ、彼は良家の良家庭に育つて、従つて餘り荒い雨風にもまれたことのない人に違ひない、だから彼の知つてゐる人生らしい人生は實際のそれよりも言ふ迄もなく書物の上からの方が多くことであらう。卑近な話、彼は學生生活をした人の百人が百人まで経験のない人はないと思はれる質屋の暖簾をさへ、恐らくくゞつたことはあるまい、或ひはあるかも知れないが、さうだと言つて、假に彼と散歩か何かしてゐる時「一寸失敬」と言つて、僕なら僕が質屋に寄つたとしても、或ひは又「濟まないけど一寸一緒に入つてくれないか」と言つても、一應は無論迷惑するだらうが、決して悪びれず驚かずに行動を共に位してくれさうである、それは譬話だが、要するに彼が物分りのいゝ、割合腹の据わつ

た人であるといふことを僕は感心して言ふのである。

此間も結婚式の披露會に招待の榮を得て、その時僕はその席に臨んで感じたことだが、列席者のうちで、外の人々は兎に角、僕の知つてゐる人たち、廣津とか谷崎とか葛西とか相馬とか鍋井とか云ふ(どうぞ、新潮記者、人の名前の横に圈點を打たずに下さい、たのみます)言ふ人々と比べると、如何にも舟木重信は花婚らしく若々しく、花婚らしくさつぱりと濁りがなく、と言つて外の人々が皆爺々してゐるといふ譯ではないが、例へばその時それ等の人々を皆花婚と同じ服装をさして並べても、一見、今日の花婚はこの人だな、と分る程、つまり若々しく見えたものだ。ところが、この花婚が極めて落着いてゐるのである。誰が花婚かな？ さぞ嬉しいだらうな、その果報者はどの人だらうと言つたやうな調子なのである。そして、今迄そんな調子で僕等の傍に来てゐた人が、いざ卓子に就いて見ると、花嫁の傍に、忽ち花婚らしい恰好をして正面にちよこなんと坐つてゐるのである、心憎いほど落着いたものである。舟木重信萬歳！

廣 島 晃 甫

僕の周圍の友達を、と言つて結局「類を以て集まる」で大部分文士や畫家たちだが、見渡したところ悉く一風變つた人物たちと言つて間違ないが、今假りにそれ等の風變り人物等の番附をこしらへるとすると、我が廣島晃甫は確に三役を下らないところに位すること受合である。

今からもう六七年前にもなるか、雜誌「假面」社主催の展覽會が讀賣新聞社の三階で催された時のこと、或ひは五本、或ひは三本と、立つてゐたり轉がつてゐたり、種々様々の状態の空瓶を書いた油畫が、少なくとも十點以上ずらりと並んで掛つてゐたのを覚えてゐる。それが中々凡作でないので、大いに感心をして作者の名前を見ると、廣島新太郎といふのだ、僕が彼の名を知つたそれが最初である。

彼の人物と會つたのはそれから間もなくのことで、たしか鍋井克之の紹介に依つてだつたと思ふ。

鍋井克之と言へば、彼が僕に廣島新太郎に就いてこんなことを言つたのを覚えてゐる。彼が言ふのに、「廣島といふ男は、君、それや變り者なんだよ。自分のものと人のものと全然見さかひの附かない男で、下宿屋などでも、玄關に脱いである下駄を足まかせに穿いてそこに置いてある傘でも洋傘でも、手當り次第に持つて出かけるといふ話だよ、」とこれは無論、克之一流の誇張話に違なからうが、その後僕自身で彼と附合ふやうになつてから、親しく彼を見てゐるのに、彼には成程そんなところがないでもない。

由來、藝術家には我儘勝手な者が多いが、廣島新太郎も決してその例には洩れず、我儘無頼な點に於いては屹度ひけを取らない。全く勝手な男で、自分の都合のいい時には友達の家へ始終やつて來るが、その友達が彼を訪問することを餘り喜ばない傾向を持つてゐる。彼は何か自分で仕事でも忙しくしてゐるとか、氣の向かぬ時とかには、友達どころか、大

臣でも大將でも、平氣で酒々として居留守ぐらゐるは使ふであらう。そして我々のやうな氣の小さいものなら、居留守なぞを使ふと、結局その客を座敷に通して暇を潰されるのと同じ程度で、後で變に氣がとがめて、氣持が悪くなつて來て、不快な時間を經驗しなければならぬ筈だが、恐らく廣島新太郎に於いては蚊か蠅かを追拂つた位にしか感じないに違ない、もつともこれは僕の想像である。

三四年も前の夏のことだつたか、當時本郷の追分にゐた彼の下宿を僕が訪問すると、珍しく内にゐるといふので、彼の部屋に通ると、一言二言話した後、彼が言ふのに、これから上野まで付き合つてくれないか、杉の木をかきたいのだが、よく様子が分らないから、それを取りに行くんだ、とのことだ。行つてもいいねえ、と例に依つて僕が生半な返事をしてゐるうちに、彼はもう立上つて、廊下を歩きながらだつたか、下宿を出しなだつたか、それとも上野へ行く途中だつたか、歸つてから鐵管卷でも食はう、と僕を喜ばせの言葉を言つたものだ。(註。鐵管卷といふのは、鮎の入つた海苔卷の謂であるが、當時追分の或すし

屋の、多分一人前十五錢以上でなかつた、鐵管卷は友達中での最大の御馳走だつたのだ。)もつとも彼の言語の不明晰なことは有名なもので、随分馴れてゐても、彼の言つてゐることの半分しか不分明で且聞きとれないものだから、その時或ひは鐵管卷は口いやすい僕の誤聞だつたかも知れない。それは兎に角、それから彼は僕を従へて、暗い裏町の夜道を、本郷の高臺に下りて、根津のごたく町を通つて、上野の高臺へと、元來は口數の少ない男だが、その晩はさすがに僕を慰めるつもりかで、不明晰な言葉で何事かほそくと話しながら、早足で歩くのだ。普通に上野公園といふと、西郷隆盛の銅像のある邊か、淺草の十二階の塔の見える廣場の邊か、博物館、動物園、圖書館の邊か、せいふくその位のところを言ふらしく、僕もその位しか知らなかつたが、その晩新太郎に連れられて行つたところは、未知の僕を大いに驚かしたもので、

「素的なところだね、驚いたね、まるで深山幽谷だね、上野にこんなところがあるのかね、」と僕が言ふと、

「こゝを知らないのか、迂闊な奴だな、」と新太郎は持前の不明晰な言葉で斯う僕をたしなめて、そして教へて言ふには、「これが上野だよ、上野……公園……よく取つ捉まる……こゝの邊……」

だが、と言つた風で、勘の悪い僕には、話題が少し變つて來ると、新太郎の言葉にこちらで推定の言葉が足せないものだから、中々分らないのだ、その時のも二三度も、三四度も聞き正した後、漸く合點が行つたのだが、つまり、この邊が上野の上野たる所で、青春男女が逢引をするのがこの邊で、刑事なんかに彼等がよくこの邊で取捉まる、といふのだ。見ると、ところどころに、彼方の森の影、此方の土手の上といった風に、青白い瓦斯の光が輝いてゐる中に、萌黄色の芝生や、黒い木立が重なつてゐるところを、僕たちの歩いてゐる小徑が羊腸と縫つてゐるのだ。そして半分しか分らない新太郎の言葉を、だから、この邊には始終取締りの刑事が廻つてゐる、といふんだな、と判断して、臆病者の僕が少しづつ、武者震を感じ出してゐると、

「ぢやあ、この邊で見張りをしててくれ、」と彼は言ふが否や、穿いて居た草履を懐に入れるなり、七分三分に尻端折して、ひらりと柵を乗り越したかと思ふと、芝草の上を盗賊のやうに音なく驅け出して、見る見るうちに眞黒な木立の中に隠れてしまつた。僕は氣味悪くなつて、後から「おい、おい！」と呼びかけたが、夜目にもくつきりと見えるところの、男には珍らしい色白の彼の二本の足は何のかまひもなく、どん／＼と木立の中に驅け入つてしまつた。

後に残された僕の氣味悪さは譬へんにももなかつた。夏とは言つたが、九月のことだつたらう。その晩新太郎が杉の木を取りに來たのは、彼一流に後れ走せに出品しようと思つて、といふのも繪具や繪絹やの材料が思ふやうに早く集まらなかつたからかも知れないが、締切日に迫られてかき上げようと言ふそのためだつたらしい。月があつたかなかつたか忘れたが、それにしても瓦斯の光が適度に照らしてゐるものだから、丁度活動寫眞で見る夜景そのままなのだ、彼の眞白に見えた二本の足が音もなく黒い木立に驅け込んでか

らは、そこ等に虫の聲一つせず、無論人通りなぞ一人だつてないのだ。それこそ逢引か、それともよく／＼物好きな散歩かの外に、一人だつて人が通る譯もないのだ。もし人の姿が見えたら、それは今し方新太郎が分らない言葉で言つた刑事か何かに違ひないのだ。そんな者が現れて、何をしてゐる？ と聞かれたらどうしよう、と思ふと、心細さは並々ならぬのである。その時バサツ！ と案外な近くで、木の葉のかたまりが枝もろ共に地上に落ちた音がした、が、さう氣が附く前に、そのバサツ！ といふ音で僕は飛び上つたものだ、やがて氣が附いて、「おい、おい、もう歸つて來いよ、」とその方に向つて叫んだが、何の答もなくて、又元の如く靜まり返つてしまつた。

それから又四五分も経つたらう、先とは全然違つた方面で、例のバサツ！ といふ音が今度は稍遠くの方で聞えた。それから、そのバサ、バサといふ音が稍近づいて來たり、又少し遠くへ行つたりするのだ。僕はその仲間の新參者が、始めて盜坊の張番に立たされた時のやうな氣がして、氣味悪さが一刻毎に募るのだ。そして暫くすると、入つた時とは反

對の側の木立の奥から、廣島新太郎はその眞白な顔と、眞白な脛とを動かして、彼自身の身體の半分もあらうかと思はれる程の分量の杉の枝を手にして、バサ／＼言ふ音を立てながら歸つて來たが、もうそれで歸るのかと思つて、僕が大いに歓迎すると、彼は例の如く半分以上口の中で、どうもいゝのがない、といふやうなことを言つてゐたかと思ふと、再び「これ、番をして、くれ、」と言ひ残して、大きな杉の枝の束を僕の足元に投げ出したまゝ、僕が後から、「もう歸らうよ……僕は先に歸るよ、」と叫ぶのに一顧もしないで、再、音も立てずに木立の中に消えてしまつた。

歸りに、僕がそれ等の杉の枝を兩腕に抱え切れぬ程持たされたことは言ふ迄もない。そして彼の下宿まで歸つて來ると、彼はその入口で、一寸待つて、くれ、と言つて、彼自身兩腕に抱えた杉の枝を持たまゝで、三階の彼の部屋に上つて行つたが、やがて空手で下りて來て、僕の持つて來た分を自分の手に受取ると、「ぢやあ、さよなら、」と言つて、すたすたと内に入つてしまつた。そして僕は彼の下宿の入口からこそ／＼と我家に向つて歩い

たことだ、刑事か巡査に見付からなかつたのが仕合せだつた、もつとも歸りには交番の前を氣を附けて廻り道して避けて通つた、だが、鐵管卷はやられたな、と思ひながら家に歸つたことである。

だが、この文章を読んでも分る如く、僕がそれだからと言つて、廣島光甫に怨を抱いてゐないことは明かである。人間といふものは妙なもので、よいことをされても餘り嬉しくない者があるが、彼のやうに随分彼自身の變つた性質から、人に迷惑をかけたり、この場合のやうに人を呆氣にとらせるやうな目に合はしながら、あの男はあんな男なんだよ、と言つて勘忍してもらへる者もある、人徳なぞといふものだらう。

その後、不幸にして、その思出の杉の枝を應用した彼の畫を僕は見ないが、恐らく展覽會に出しても通過しなかつたのだらう。一朝にして昨年の帝國美術院展覽會で認められた彼の畫といふものも、僕は行かなかつたので見なかつたが、繪はがきなどから想像したところによると、どうも僕が彼に期待してゐる程の出來榮のものとも思へない。だが、何に

しても名を成しておくのは、彼をこれ迄のやうな貧乏から救ふ上にも、陰ながら僕などが彼に期待するやうな傑作をものする上にも、便利なことに違ひないから、彼のために大いに祝盃を上げよう。

廣島新太郎！ 今どこにゐるのだ？ 去年の暮、僕の旅先へ、「君の居所を探すのにひどく骨が折れた、」と突然葉書に書いて来て、後で永瀬義郎に聞くと、全くその通りとかで、彼の所へやい／＼言つて僕の居所を聞き合はしたとかだが、そして、「僕は今左記のところゐる、（何でも須磨か明石かの一流らしい旅館の名が左記に書いてあつた、）今度瀬戸内海を廻るつもりだ、君も短い文章を時々書くことにして、一緒に行く氣はないか？ 表記の新聞社で（神戸何とか新聞といふ判を押した葉書だつた、）費用一切を持たせるから」と書いて、最後に圈點附で「返事をこの葉書着次第くれ」と結んであつた。で、僕がその時日と、もう少し詳しい條件とをも一度聞かしてくれ、と返事をするとそのまゝ、熟んだとも

潰れたとも言つて來ない。相變らず廣島流だ、と會ふ友達毎にその話をして笑つて居るのだが、本當にその後はどこにどうしてゐるのだ？ 返事くれ給へ。（九年三月・諏訪にて）

論

十月文壇事始

一月評といふもの

謹賀新年

大正十年正月の各雑誌に現はれた諸家の創作その他の文章の讀後の感想を、私はこれから追々に述べようとするのであるが——さてこの月評といふものは、近頃その可否が大分問題になつてゐるやうだが、私の考では、廣く文壇といふ立場から見ると、在つて決して意味のあるものとは思へないが、無いと妙に寂しい、謂はゞ紳士の夏羽織か、家の鼠か、刺身のつまか、位にしか認められないのである。ところで又別の見方をして、現に小説家であるところの私一箇の経験から言ふと、餘の作家は知らず、正直に白狀するが、私には

中々それがある方が結構にも思へるのである。と言ふのは、それは随分月評する人に依つては分らない事を言つたり、不深切な評をしたり、邪険な物の考へ方をしたり、それを作家の方で一々取上げて聞いてみると、實際その翌日から忽ち筆がすくんで取れなくなる位のものであるが、兎に角それ／＼同じ目鼻を持った、鬼でも蛇でもない人間の言ふことであるから、例へば私の場合で言ふと、それは私の或小説からその人が感じたことを、そこに大きに好意を持つたり、或ひは悪意を挟んだり、反感を持つたり、承認したり、輕蔑したりしてだが、現はして言つてくれる譯であるのだから、私には正直な話どんな私に對する月評でも、目に觸れたものは讀み、味はひ、捨て、拾ひ、閑口し、默殺し、他山の石とし、それ／＼兎に角言ふに言はれぬ参考になるのである、大方の作家諸氏はどうであらうか？ だから、廣く文壇から見るとは、全く刺身のつまか、國の鼠ほどの値打しかないものかも知れないが、そして大方の作家にもさうかも知れないが、私にだけは確にある方が結構に思へるものである。

ところが、不幸にして、私の今まで目に觸れた範圍では、いゝ月評といふものは中々少くて、もつとも今言つたやうに作家の爲にはどんな悪い月評でも多少の参考にはなるのであるが、一般讀者にはそれが随分悪影響をして、大いに彼等にそれ／＼の作家に對する感想を誤らせる方が多くはないか？ とも思へて私には仕方がないのである。だが、もう一つ考へ直して見ると、それも案外心配する程のことではなくて、幸ひ月評の讀者といふものは極く一部の、私もその中に這入つてゐるものであるが、作家側の人位に限られてゐるらしく、その證據に、私の過去十年の見聞に依れば、未だ月評に依つて、その庇護に依つて大家となり、月評に依つてその爲に没落したと言ふ作家を見ないことである。それどころか、月評などは柳に風と受流して、最早や月評家の方でもその人を疎外した時、その人はそれと同時に漸く押しも押されもしない文壇的地位を得てゐるやうにさへ、私には見えるのである。して見ると、月評家の説を一々密かに參省してゐる私などは、無論未だ文學研究の一書生に過ぎないことは、餘りに明かな事であらねばならぬ。

元より、文學に志すところの多くの書生は、その八九分までは幼少の頃から小説を書かうと各々の年期を勤めるのに反して、誰あつて月評をしようと思つて勉強したものはないのであるから、現今小説のうまい人はあつても、月評のうまい人なんてないことには違ひない。それどころか、月評など、言ふ文字は正しい出版屋の文學辭典にはないことに違ひない。殊に年に幾箇となく小説を書かなければならぬ状態にある多くの作家の、自信ある立派な作などがさう毎月の雑誌に、さらに掲載されてゐる譯のものではない。その作家自身だつて内心恐縮してゐるやうな作が随分あるに違ひない。一口に言ふと、それ等の作品と毎月取組合ふ月評なんて、誰がしたつて、よし夏目漱石がしたつて、ドストイェフスキイがしたつて、面白くなる筈がない、とまあさう言ふ譯ではないか？ ……つい阿呆らしい談議をしてしまつたが、そして私は今日から追々に色々な作を読んで行つて、それ〴〵感想を記して行かうとするのであるが、だから、その書かうとする事は、どうして、何の期待も持つて貰へるやうなものでないことは、それは重々無論のことである。

一 私の月評に就いて

門松は冥土の旅の一里塚、目出度もあり目出度もなし、とふと口吟んだので、何といふ事もなく冒頭に一寸書いて見たが、さて私は何に就いて書いてゐたのかと參省して見て、さうだ、月評に就いてだつた、月評は何とか何とかで、目出度もあり目出度もなし、とまあ昨日はさういふやうな事を述べたのであつた、そして私自身は大きにそれを目出度がつてゐる一人であることを述べたのであつた。

だが、近頃の月評は友達賞め、仲間賞め、編輯者賞め、或ひは無茶苦茶貶し、一として碌なものはないぢやないか、と私が月評を認めるやうな口吻を漏すと、大抵の人は斯う言つて毛蟲のやうに顔を繋めるのである。言はれて見ると如何にもさうらしくも私にも思はれるのである。例へばM—月評家の月評を見ると、讀者がそれに依つて得るところは、彼の交友の名を知る位のもので、その範圍に於いて彼の批評は深切で、周到で、少々お世辭

入りであるかときへ見えるのである。

だが、少しのお世辭は人と人との間の禮として宜しく、又深切で周到であることは誠に結構な事であるから、この次の月には又別の方面の作家たちにもさうであらう、少なくとも彼の文章に依つて、私たちの氣の附かない或小説の別の見方、別の読み方を教へられて、大いに得るところがあらう、と思つて私はもう随分長い間期待してゐるのだが、春去り秋來つても、さういふ期待は一向かなはぬやうに見えるのである。さうなると、彼の月評だけを愛讀してゐる讀者は、そんな愚な讀者はよもや日本人にはないだらうが、現今の文壇には彼の友人數人の外に日本には小説家がゐないと思ひ込む譯になる、とすると、讀者の不幸それより大なるものはない。やつぱり、どうしても、月評といふものは目出度くないものだらうか。

だが、私の見るところでは、これもどうも人間神様でない限り仕方がないものとあきらめる外はないのである、今日、箇人の月評家どころか、新聞だつて中々あてになつたもの

ではない、私のところに来る二十歳の或文學青年の話に私は毎日時事新報と讀賣新聞の文藝欄を愛讀してゐますが、後者を見てゐますと細田民樹といふ作家は日本一のやうな氣がしますし、ところが他方では名前さへ見かけることがありません、時事新報だけ見てゐますと、近頃早稻田派の文士といふものは洋行でもしたのか、日本にはゐないのか、文壇には人間社と三田文學と新思潮派の人ばかりしかゐないやうに見えます、一體本當はさうなのですか？ と聞くのである。

けれども、やつぱり、これも私の考へでは、どうせ人間には觀音様のやうに、一人で八方にも十六方にも顔を附けてゐる者も、一人で百本も千本もの手を持つてゐる者もないのであるから、その彼等の批評が片寄つたり、書くことに私があつたりするのは、中々無理もないことである。

……無論、以上の言葉は人のことを攻撃する爲ではなく、それはほんの譬話で、實は私自身がこれから書かうとする事の、斷りの豫防線であることは言ふ迄もないのである。が

断りといふと、もう一つ言つておきたいのは、變なことを言ふやうだが、現在日本の文壇に五十人も百人もある數多の詩、劇、小説類の作家には、これはもつとも私だけの見界ではあらうが、やつぱり官吏や俳優やその他の職業の者のやうに、等級があると見えることである。言ひ換へると、一年生作家、二年生作家、中學級作家、大學級作家等々となるやうに思へるのだが、不都合なことには、それが學校のやうに分れてゐないものだから、と言つて幼年雜誌の投書のやうに、何の某何歳と書いて貰つても仕様のないことで、それ等を読みそれ等を多少でも評しようとする私の立場が、色々にならねばならぬかと思ふのである。例へば或場合ではこの作家のものとしては結構な出来だとか、又他の場合ではうんと評準を高めて、トルストイやストリンデルヒの作を読んだ時と同じ評準から、こんな作は三文の價值もないとか、元々私がそれ等の作家の先生の位置にあるものではないのだから、その日その日の風次第、その時その時の氣分に依つて、甘く見たり辛く見たり、されば元より今日名高い月評の大家でさへ、先にも言つたやうに公平無視の文章は書けな

い有様であるから、私のやうな經驗の淺い者には、親しい友達と半分親しい友達と十度も會ふ人と一度も會はぬ人と、平素好意を持つて居る人と持つて居ない人と、利害關係のある人となない人と、それ等の違ひに依つてそれ等の人々の作に對する態度が違つたり、そして、それ等のすべてを自己辯護の具に供したり、私自身は出来るだけ虚心平氣でやるつもりでも、觀音様でない限り、随分怪しいことは重々無論のことである。

近頃の小説の月評、殊に評論家の月評を読むと、「人生をより善くする」か、しないか、と屢々詰問してある。それにはそれぐの理屈もあらうが、煎じ詰めたところは、つまり今も昔も變らぬ、人生の爲の藝術か藝術の爲の藝術か、といふ争ひになるのであらう。だが、私の場合で言ふと、私自身どちらの味方かと問ひ詰められたなら、さあ、どちらでせうか？ どちらかに定めなければ殺すぞとでも嚇かされたら、どうしても後者の組に這入る者であるが、だからと言つて、私には、例へば町で反對派の人生の爲の藝術家と會つた時、私は決して彼等と言ひ争ひはしないつもりである、と言つて降参もしないつもりである、

が又無論彼等を輕蔑もしないつもりである、私は慇懃に帽子をとつて、叮嚀に挨拶をして、さて追分の道で彼等の健康を祝しながら、右と左に別れることである。

私の考では、何が人生をより善くするか、如何なる者が人生の善であるか、過激派が正しいか、帝國主義が宜しいか、正直の所、それは六道の辻に立つたよりも、もつと見當が付かないのである。だからと言つて、私は私の同胞の一人が、その六道の辻の一つを目指して、これより外に人生をより善くする道はない、人生の善への道は正にこの道であると言つて、私にはやつぱり信用の出來ない道ではあるが、その人がさう信じて突進したり、或ひは街頭に立つて人々に突進する號令をかけたりにして居るのを、どうして、彼が信じて彼が行つて居ることを、輕蔑いたさうか？

だが、私は私だけで、私の心の向くまゝに、何といふのか、やつぱり一口に言ふと、その藝術の道を歩いてゐる旅の者であるが、私だつて時とすると、私自身の考へることに、疑ひを持つたり、不安になつたりして、屢々苦むものである。恐らくは先に追分の道で別

れたところの、所謂人生派の人々だつても、晝は夢中で巷に叫びながら、だが夜が更けて人が靜まつた時は、正直な話、屢々自分自身の信じ、且つ叫ぶところのものに、不安や疑念を抱いて悩むことに違ひない。近頃、世の中が頻りに騒がしくなつて、私の安閑として自分一人のことに思案してゐる窓の外には、或ひは革命の歌も聞えて來るのである、鐵砲や劍の音も響いて來るのである、其なかには嘗て私が共に藝術を語り合つて、あゝ世の中で最高のものは藝術である、などと夜をこめて感激し合つた友達も混じつて見えるのである。それを見て何事ぞ、花見る人の長刀、と私は口を吟むこともある、又私は密に障子の影から扇子を上げて、彼等の前途を、神よ、守り給へと祈ることもある。私は私達の同胞が盜坊になつても、軍人になつても、職工になつても、資本家になつても、或ひはその外私の最も齡しない事を叫んだり、行つたりする者になつても、私は彼等の、そして又私たちの、つまり人の心といふものを信じて疑はぬものである。即ちどうすれば人生をより善くするか、何が私たちの善であるか、それは三角のものか、四角のものか、マルクスの

説か、ニイチエの言ふことか、レニンの道か、山縣公爵の考か、私がそれ等のどれをも信じないとしても、私は唯一つ、彼等のどれにも持つてゐる筈の人の心を信じて疑はぬものである。

私が考へるのに、人はバベルの塔の昔話以來、誰だつて各々天に上らうと言ふ心は持つてゐるのだが、悪魔の悪戯の爲か、神の試みに依つてか、各々言ふところの言葉が違つてしまひ、爲すところの行ひが様々になつてしまつたのである。或一團の人々は悲しい時に笑ひ、他の人々の一團では面白い時に怒り、斯くて人々は今見る如くごちやく／＼になつてしまつたのである。或者は大勢の人々の前で卓を叩いて演説するのである、或者は人のゐない密室でひそ／＼と獨言つのである。自分の思つた事を思つたまゝに叫べる人もある、自分の信ずる事を反對の言葉で囁く者もある、怒つた顔をしなければ物の言へない人、笑つた表情でなければ話の出来ない人、人は各々その顔形の違ふ如くに、その言ふこと、爲すことは違ふけれども、バベルの塔を積んで天國へか、共和國へか、帝國へか、無政府國

へか、それこそよりよき生活へ、眞へ、善へ、行かうと念ずる人の心は一つである。藝術はその心を開く鍵である、とまあ理屈を付けると、そんな風に私には思へるのである。だがレニンだつて、トルストイだつて、芭蕉だつて、或ひは弘法大師だつて、勉強してこつ／＼と歩いて行つたら、彼等が別れた追分の道は、いつか一つの廣場に出て、や、失敬、や君も、や、あなたも結構ですな、とそこで皆々握手して、目出度し、目出度し、この時舞臺一面黄金色の光に輝き、靜かに、啾唳たる音楽と共に、幕、といふことになるのであらう。……

君は香氣な事を言つてますな、と或人は言ふだらう、何を夢見てゐるんです？ と別の人は笑ふだらう。だが、仕方がない、香氣かな？ 笑はれる話かな？ と私は一人で呟きながら、つまりその藝術の道を辿る者であります、とまあそんな風な譯のものぢやないですか、と私は思ふのである。

「三つは捨て鐘」と時の鐘でも無駄を打つものである、三回に渡つての無駄話を讀者は許

して下さるでせう。(以上十年一月一、二、三日時事新報所載)

二四二

一 若山牧水の歌

さて、これから愈々月評を始めるのであるが、正月は寄席、活動寫眞、犬芝居、玉乗り、猿廻し、三河萬歳、皆同じことで、各作家が一人で幾つもの作品を、色々の事情から引受けて、自然濫作するせるか、殆ど力の這入つた作や、優れた作が見當らない、評する者の張合ひのないこと夥しいことである。が、實を言ふと、私も未だその五分の一位しか讀んでゐない上に、讀んだものと言ふと、現にこれからその讀後の感想を書かうとする「大觀」などは、先月の十七八日頃に町の電車の中で、乗換場所を氣にしながら、匆々の間に瞥見した位のことであるから、その記憶さへ今では大分危い程の次第である。が、元々月評などと言つて、殊にこの月の様な大體に於てお粗末な作品揃ひのものを、これは面白い、あれはつまらない、とだけ言つて過ぎては、讀む人の迷惑の少々ならぬことを考へて、そこ

で餘計な感想や、餘計な注告や、憎まれ口や、お世辭や、要するに度々閑談まじりに論ずることは、無論、讀者これ迄の私の文章で十分感じられたらう如く、止むを得ないこと、承知していただきたい。

さて、「大觀」であるが、私はいの一番に若山牧水の「土を愛する村」といふ短歌入りの小品文を讀んで見たのである。若山牧水の名は私にとつて甚だ目出度いのである。今から彼此れ十年前に彼の歌集「別離」が出た時、何でも私は私立大學の文科の一年生頃のこと、早速一本を求めて、朝に夕にその頁を文學書生らしくセンチメンタルな聲で口誦むことを樂んだものである。それからの十年の間を、私自身のことを言ふと、或時は養豚事業を始めようと思つたり、役者にならうとしたり、口入屋の手代になりかゝつたり、相場師の中に這入らうとしたり、村役場の吏員になりかけたり、一寸雑誌記者になつて見たり、等等、等。だが、その都度文學のことを忘れ兼ねて、ふと雑誌屋の店頭に立つて雑誌の頁をのぞいて見ると、牧水はいつも變らず歌をよんでゐるのを見出したことである。そして十

年眞に一日の如く、見れば彼は今も尙專念頻りに歌をよんでゐると見えるのである。これは眞に驚くべきことで、十年市長を勤めることよりも、十年歌をよみつゞけることは何と百倍も出来にくいことに違ひない。その點からだけでも、私は幾多の田尻某後藤某よりも、その百倍も牧水を尊敬するものである。四五年前私が或雑誌の記者を三ヶ月程してゐた時、彼の短歌をその雑誌に寄稿してもらつたことがあつたが、私はそれぞれの時に雑誌屋の店頭で拾ひ讀みした時にもまして、その時は十分彼の歌を味はつたことであるが、それは何でも「朝戸出云云」と言つて、毎朝散歩に出る時の偶感を十首ばかり歌つたものであつたが、それを編輯室の机の上で讀んだ時、私は失禮ながら彼の心境が最早や中々揺るがない堂に這入つてゐる事を感じたものである、今若しその時の彼の歌を一首でも思ひ出すことが出来たなら、私は感激を以てその歌を評釋することに於いて、立所に十枚以上の原稿紙を費すことが出来たゞらうと思ふのである。近頃私は二三の人々から、彼の紀行文が中々上等なものであると聞いてゐるが、未だ一度も見たことがなかつた、そして此度「土を愛する

村」を讀んだのである、感慨なからざらんやである。

「土を愛する村」に依れば、目下若山牧水は駿河國沼津在の何某といふ村に住んで、毎日その村の近くの「山の根の淵」に行つては、二日も三日も一週間も、釣れない魚を釣りに行つたり、「松原」の海岸にいつも同じ形をしてゐる富士山を見に行つたり、それも五欲煩惱の袋見たいな私たちが都會にゐる人間から見ると、殆ど信じられないやうな、まるで草か木かに化けたやうな悠々自適の生活をして居ると見える。「土を愛する村」はさういふ生活を記録した小品文で、所々に歌が這入つてゐる。思ふに彼が無心に一言物を言ひ、一呼吸息を吐くと、それが私たちが常往座臥の際連發してゐるところの、「金が欲しい」とか、「いい女だな」とか「これは今の社會制度の罪だ」とか言ふのと同じやうに、彼のは一言一句が悉く歌になつて、つまり「芋の葉のやぶれ静けき霜月の香貫が原ゆ富士のよく見ゆ」といふやうなものになるのであらう。

もつともこの小品文は恐らく彼のものとして、出来榮から言つて上乘の部に屬するもの

ではないだらう。だが、彼の場合にあつては彼の如何なる歌にしても文章にしても、彼は最早何の巧く歌つてやらうとか、上手に書いてやらうなどと言ふ成心は少しも持つてゐないやうに見える。そして彼は毎日釣れない魚釣に一週間でも幾日でも通つたり、海邊の松原にいつも同じ富士の山を見に行つたりして暮してゐるのであらう。恐らく私たち凡俗の多くの者は、もし今日淺間山が破裂してその焼土の下になつたり、明日流行性感冒の爲に墓に旅するやうな事になつたら、色々後悔することや、謝罪しておかねばならぬ事や、怨みを述べておきたい事や、何も彼も中途半端なことばかりで、何と心残りが多くて、さぞや浮かばれないことであらうが、この「土を愛する村」の作者なら、十萬億土の道だつて、娑婆の道だつて、おんなじ心理状態で、歌つて歩いて行くことだらうと思はれる、何とも羨ましい心境である、誰がこゝに「生活」がないと言へようか？

由來日本人は妙な人種で、ロマン、ローランやトルストイ等の屬する國民とひどく趣を異にすることは、日本の豆腐屋にしても、巡査にしても、下駄屋にしても、官吏にしても、

或ひは私たちのやうな彼等よりもずつと楽しんで、難かしく言ふと、生命を打ち込んで出来る筈の職業の者にしてからが、彼等は皆その職業を何も仕様がな、渡世だから、といふ考へでやつてゐる、誰あつて夜が更けて胸に手を置いて考へた時、各々の日本人は各々の生活を樂んでゐるとは見えないことである。現在はこんな宙ぶらりんな事をしてゐるけれど、愈々となつたら出家遁世して、閻魔大王や佛様やに申譯をしよう、といふやうな考へを持つてゐる。私たちの仲間で云ふと、享樂派でも、人道派でも、勞働派でも、唯美派でも悉く松尾芭蕉の藝術にだけは頭を下げる所以である、これはマルクスやドストイエフスキイには合點の行かぬ心持に違ひない、閑話休題――

時雨空小ぐらき空にそびえたる富士の深雪のいろ澄めるかな。

潮風のみなみ吹きつのり愛鷹の峰藍いろに曇り終れり。

これは牧水がこの月の「新文學」に「山かけに住みて」と題して寄せてゐる五十首の歌の中から、その第一頁から一寸私の目についたまゝに抜いたのであるが、私はふと百人首の繪

札に山邊赤人とか柿本人麿とか、大きな疊の坐蒲團の上に坐つてゐる姿を思ひ出す。私は牧水の近頃の歌を見る毎に、この男も既にあの疊の坐蒲團の上に坐る資格が出来るに違ひない、と屢々思ふことである。屹度今から千年も経つて、赤人と牧水とどちらが先の代の人であつたか、歴史家でなければ分らぬやうになつた時、牧水は赤人と背中合せの頁に疊の坐蒲團に坐つた繪姿を掲げられて、僅一首の歌だけで千載に残るだらうと私には思へるのである。あの坐蒲團は中々容易に載せて貰へるものではない。謂はゞ唯一の事に、その外の一切のものを忘れて、没頭した人間にしか、與へられないものである。年の始に當つて、一寸一言牧水を推選した所以である。

こんな月評はあつたもんぢやないと讀者よ、怒る勿れ、先にも斷つたやうに、これは私の謂はゞ趣味で、通り一片の月評だけでは、餘りに呆氣ないものなることを恐れて、これからも屢々私はこんな風に書くつもりである、諒焉。

一 隣人江口渙に就いて

「實業之世界」に江口渙が「無限廻轉機」といふ小説を書いてゐる。渙は私の隣人で、そして隣分古くからの友人で、詳しく言ふと、お互にどんな着物を何枚持つてゐるか、どういふ食べ物が好きであるか、財布の中に幾ら程持つてゐるか、さういふ事まで大抵知り盡してゐる程接近して住み、且つ往來してゐるものである。

彼の家と私の家とは、大凡十間程の間隔を持つて東西に走つてゐる二筋の路次に、一は南一は北に面してその入口を持つて、その路次との間隔の十間を半分は仕切つた奥行の家の一つが彼ので、他の一つが私ので、それが背中合せにくつ附いて建つてゐる位置にあるのである。今、私が斯うして原稿を書いてゐる場所から、だから十間以上離れないところに、彼、江口渙はまだ寢てゐるだらうか、起きてそれとも持病の神経衰弱で、ぐしやくいやしてゐるであらうか、それとも勉強して原稿紙に向つてゐるであらうか？

私の二階の部屋から屋根越しに真正面に二間程離れたところに、背中合せの彼の家の物干臺が立つてゐる。「宇野—オ！」と言つて、殆ど一日おき位にそこに江口渙は姿を現はして、「お、」と答へて椽側に立つて出る私に話しかけるのである。始終のことであるから別に變つた話はないのであるが、例へば「昨日××連盟會に行つたら斯う斯うで面白かつたよ、」とか、「誰某の何とか論は實に愚劣だね、」とか、「何々といふ小説は一寸面白いよ、」とかそしてその間大抵三分か五分の後、「ぢや、さよなら、」失敬、と猫のやうに双方の屋根から引上げるのが常である。

その江口渙の小説の讀後の感想ならば、一度ぐらゐる例を破つて、私の方から椽側の欄干に身體を乗り出して「江口—イー」と兩手を喇叭の形にして口に當て、彼を物干臺に呼出して、そして發表してしまつたらいいやうなもの、そこは紙に書けないやうな事でも口では言へ、口で言へないことも紙には書けることがあらう。それに、これは私だけの經驗かも知れないが、原稿紙に向つた心意氣といふものは一寸又不斷と違つて氣の締まるもので、

さらば、今日は物干と椽側との話の代りに、さあ何を言はうか、紙上に於いて江口渙に物言ひかけようと思ひ立つた次第である。

さうは言ふものゝ、諸君に自分の親しい友人に役者を持つてゐる人がありますか。私の經驗から言ふと、その素顔や地聲に餘り親しみ過ぎて、その俳優の日常生活や、癖や、病氣や、飲食のことまで知り過ぎてゐると、さて彼の舞臺を見た時、別の面白さは暫くおいて、變なものが見え過ぎたり、分つたりして、興味の一半を削がれるものである。だから、まして批評などは如何にも出来にくいものである。これを小説家の場合に當て簞めると、少しは違ふが、やつぱり大體同じことで、今私が江口渙の小説を讀んで感想を記さうとする時、それと同じ思ひに突き當るのである。

先づ、江口渙は可成り遅筆で、随分精根を枯らして苦心する作家であることは、普通には餘り知られてゐない側のこと、更にあの侃々諤々の辯論をするところの、容貌一見怪異の好漢が可成りひどく蒲柳の質で、常に座右に藥を絶たない程であることは、一層人に

知られてゐないことであらう、それを私は知つてゐる。私の見るところ、江口渙は正直で、朴突で、單純で、神経質で、敏感で、近頃流行る強氣弱氣説で言ふと、彼は第一枚目の薄い皮が強氣で、二枚目の比較的厚い部分の皮が弱氣で、第三枚目の更に厚い皮も亦弱氣である、それより下に人間にまだ何枚そんな皮があるか、それとも直に身になつてゐるか、それは神様でなければ分らぬことで、又人に依つて皮の數も違ふだらう。それは兎に角、彼と私と日常話する事は、彼は無駄話と藝術話、私も無論無駄話と藝術話で、たゞ彼の無駄話の中に時々社會運動の挿話のやうなものが混じる位で、或ひは彼は相手が私だから、その方の話は通じないと思つて、控へてゐるのかも知れないが、私の見るところを以てすると、何と言つても彼は相當に色々細かしい理屈や遣り方のあるらしい社會問題の理論その他よりも、藝術のこの方により多く通じて居り、且つ分つてゐるやうに私には思へてならぬのである。若し藝術科と社會科と二つの入學試験があつて、彼がそれを受けたとしたなら、私は思ふのに、屹度彼はその前者には通過するだらう、だが又屹度その後者に

は落第するだらうと私には思へてならぬのである。私は嘗て彼が絢爛極まる文章の小説を書いたことを知つて居る、彼がオスカア、ワイルドを研究した時を知つてゐる、森鷗外に文章に私淑したことを知つてゐる、社會問題に心を向けかけた時を知つてゐる、彼の心が幾度も動搖したことを知つてゐる、そして最近社會主義同盟に這入つたことを知つてゐる。私の見るところでは、それ等は彼として神様に命じられた必然の路であるかないかは知らないが、彼として決して出鱈目に歩いた道ではないやうである。が、そんな風に何も彼もあんまり知り過ぎ、察し過ぎて、それもよからうと言つてしまつては、神ならぬ私には物の言ひやうがない、さらばと言つて、彼の新作「無限廻轉機」を縁として、その批評だけなら餘りにほんの一口に過ぎよう、さて彼に何と物言ひかけようか？

小説「無限廻轉機」は江口渙がこの一年程の間に發表した幾篇かのうちでは、比較的上位を占めるものであるかと思はれる。こゝには近頃の彼の作中に時々顔を出すところの社會問題は出て來ない、——一發明狂が、一度動力を與へたら無限に廻轉する機械を、それが

出来上つたらどんなに人間を益するだらうと思つて、妻子を犠牲にして、五年越しに刻苦精勵してゐるが、一向出来上りさうにないといふ有様が、その周囲の人々を背景にして現はされてある。可成り短くないものであるが、讀者はすらくくと、時々作中の出来事に笑はされながら、読みつゞけることが出来る。

私の見るところでは、小説家江口渙は、今迄の成績から推すと、意識してその中に社會問題を押し込んだり、好んで殘酷な行爲に力點を入れて描寫したり、わざ／＼絢爛な文章を作らうとしたりした時、それ等が大抵失敗するのに反して、唯一寸したテーマを捉へて、樂々と、他意なく書き流したものの、中に、彼の一流の善良さや素直さの含まれた、中々鈍才どころか、彼も亦侮り難い才人であるかな、と屢々思はせる程、すらくとした、こだわりのない佳作が見出されることである。だが、私の觀察では、彼は嘗てその持つてゐる才を自覺したことがないかと思はれる程、これを勞^{いたは}らす、育まず、且つ等閑視してゐると見える、そして而も一時の思ひ付きや、昂奮やが屢々その才の芽生や成長を妨げてゐると

見える、といふやうな見界から、私は「暮色の奥」や「淳吉と失業者」よりも、「性格破産者」や、それに比べるとずつと出来榮は劣るが、この「無限廻轉機」の方に、言ひ換へると、何かを主張する爲に書かうとしたものよりも、何かを現はす爲に書かうとしたものに、私はこの友人である隣人に向つて賛成の意を表する者である。「江ローイ！」と私は私の稼働から彼の物干に向つて呼びかけて、「あの種類の小説を書きつゞけたらどうだ、僕は賛成だね」と言ふつもりである。

だが、斯う言つたゞけで止めてしまつては、恐らく私は友人と讀者とに對して不深切であるといふ譏を免れないだらう、そして又それは元より私の本意ではないのである。私のやうな者でも人と生れたからは、私の考へのあるところを十分に述べて、私の敬愛する隣人に私並の苦言を呈することは、神と人への奉公の一端にはなるかと思ふ。却説、この小説の缺點を言ふと、少し輕々と扱はれ過ぎてゐることである、そしてこの事はこの作者の他の多くの作品に對しても、同じやうに言はれることではないか、と私は考へるのである。

恐らく作者は、その類稀なる正直と、敏感と、單純との故に、物事に餘りに早速興奮し餘りに早く感染し餘りに思慮なく實行するところの缺點を持つてゐるのではないか、彼は先の例で言ふと、又皮の譬を持出すが、第一層の皮膚で興奮し、第一層の皮膚で感染し、第一層の皮膚で實行する、だから私には、彼の美文癖も、一轉してそれを止めることも、さては勞働運動に加盟することも、それが何の彼の嘘である筈はないのだが、しかしいつも本當のものになり切らない恨があると思へてならぬのである。その爲に小説道中に於いて、この旅は決して彌次喜多道中のやうな浮いたものではない、社會運動の旅、宗教の旅、色々ある人間道中の中でも、中々結構でそして行き甲斐ある旅である、その道中に於いて、彼は私が前に述べた彼の才を以て、箱根の山を越すことは出来たが、それでは大井川を越し兼ねはしないかと危ぶまれてならぬ所以である。

これは私たち友人の立場から言ふと、殆ど彼の美點であると思へるところの、彼の本來の正直と單純と敏感の諸性質が、智恵の盛りを日本の粗暴を尙ぶ中學校に學び、大人の分別の付き始めに悲歌慷慨の産地なる九州の高等學校に遊ぶうちに、益々彼の性質の中に根を張つたものであるか、それは神様でなければ判断の付かない事であるが、兎に角、今や彼も年既に三十歳を半過ぎて、殊に敏感なる彼の性質として、いつ迄私が非難した状態に低徊してゐる筈があらうか？ 恐らくは最早や私の非難は一年も前の彼にのみ當て箴まるものであるかも知れない、いつ迄彼がさういふ状態で、内心の、一枚も二枚もの皮の下にある内心の、寂しさを感じない筈がないからである。されば今に、人の目にも見えて、たとへ彼が今日のまゝに社會主義者であらうと、藝術主義者に變らうと、彼は昨の非を悟ると忽ちに改める底の君子人であることは、さういふ性質を持つこと現代に於いて彼の如きは珍らしい一人であるが、そして小説道の大井川を渡る日のあることは、私の信じて疑はないところである。江口渙！ 今日はいつもの屋根越しの對話とは少し變つた話をした、君、幸ひに諒とするか？

一 里見淳の作品

二五八

「龍之介から薙へ」とか、「薙から龍之介へ」とか言ふ言葉を近頃ちよい／＼耳にする。これはもつとも、この兩人が共通して才子肌で、藝術主義者で、人気者で、一方は新思潮、他方は人間社、つまり角力で言ふと何々部屋と言つた風なもの各々選手で、役者に見立てて言ふとつまり二枚目どころで、ぱつとして華やかであるところから、その全盛がどちらへ傾くか、と言ふことの坊間の彌次馬批評に過ぎないが、私の考へに依れば、今假りにこの「から、へ」といふ言葉を推移とか、進行とか、運動とかの意味に解釋するならば、これは決して水の流れや鐵砲玉の進行の如く決して一方から一方へ過ぎ行くことではなくて、恰も時計の振子の如くに、常に「から、へ……」から、へ、」と繰返す運命にあるかと思へてならぬのである。

昨年の成績では、大體に薙が中々勉強して結構な作を幾つか書いたので、人氣が彼に随分集中してゐたやうである、果は多くの雷同批評家が彼に完璧の作をする作家であるといふ勳章をさへ呈する盛況であつた。けれども、私の見方は少し違ふのである、私は思ふのに、彼はひどく熱心に完成を期する心掛の作家ではあるが、未だ完璧の作を見せない點に於いては、外の、彼よりも下級の一年生二年生作家がさうであるのと、少しも變りはないのである。名作「父親」にしてからがやつぱりさうである。早い話があゝの作の書き出しの一頁餘りのところは、彼の他の作の幾つかと同じく、読み難く分り難いこと夥しい、そしてその読み難さ分り難さは、讀者が進まないからとか、讀者の頭が悪いからとか言ふのでは斷じてない、殊に私のやうな少し腦の悪い者にはあそここのところを、丁度中學時分に難かしい數學の本を読んだ時のやうに、二度まで繰返して讀んだが、それでも餘りはつきりした印象を得ないまゝに、まゝよ、もう少し讀んで行つたら分るだらうと思つて讀みつけけた記憶を持つてゐる。今度の雑誌人間誌上に出てゐる「地獄」の最初の部分もやはり多少その難がある。恐らく讀者が讀みづらく、頭を悩ますだけ、それだけ作者も苦心して筆を遣

るのかも知れない。だが、それほどの周到な用意をする作家が、それ程の事に氣が附かない筈があるまい、と思ふのである。そして若し、それをしも自ら認めて、あの書き出しの手法を作者が敢然として取つてゐるのだとすると、これは私だけの考へだが、それは彼の心得違ひで、あの流儀は筆を以て物を語る方法には適當ではない、寧ろ高坐で扇子と共に人物の聲色を使ひ分けつゝ語る時にこそ、最も宜しきを得るところの表現法ではないか、と思へてならぬのである。斯ういふ私の言葉が例に依つて些か俗語に過ぎたので、或ひは禮を失する物の言ひ方に見えるかも知れないが、諒されよ。

更に阿呆らしいことを言ふやうだが、讀みづらいと言ふ事は讀み易いと言ふ事よりも明かに不可ないことで、ところが稗の小説は全體に於いて讀みづらい事で決して人後に落ちない、この點で假りに小説の勸進元といふやうな者があつて、一々の作品を毎月學校のやうに採點するものとする、彼の小説はその故に五點なり十點なり引かれなければならぬものだ、と私は考へるのである。現に私にしても、私は屢々言ふやうに文學は今も三度

の飯よりも好きで、どんなものでも讀み漁る性質の者であるが、それでも此頃は何彼と忙しいので、つい選擇して讀まねばならぬ状態にある者で、いつでも彼の小説を幾度も途中で止めようと思ひながら、いや／＼これは當代の名手里見稗の落款のあるものだから、と思ひ直し思ひ直して、そして最後まで讀みつゞけるものである。讀み終つて、あゝ、努力して損をしたとは流石に思はされることは少い、所々やつぱりやつてるな、と時々は例の那須の與一の扇的話ではないが、敵も味方も船端を叩くといふ流儀で、やつたな！ やつてるな！ と感嘆しながら讀む者である。だが、それも彼の他の小説の場合のことで、今度の「地獄」に於ては、私は徹頭徹尾賛成する譯には行かぬのである。

たしか平林初之輔だつたか、里見稗の藝術を論じて、彼の讀者はそれを頭から肯定するか、頭から否定するか、の二つのうちのどちらかになる、と言つたことがあるのを私は讀んだやうに記憶する、そして至言であると思ふが、私一箇の態度としては、私は如何なる藝術に對しても、さういふ態度を取りたくないと思つてゐる、そして取つてゐないつもり

の者である。左様、さうして、私の見るところを言へば、彼の藝術を頭から肯定してかゝつてゐる人の言の如く、彼を名人であると断定することは出来兼ねるのであるが、彼が名人心得、或ひは準名人に相當するものであることは十分認めるものである。彼の言語から察するのには、彼は最も銜氣を忌むところの人であると見える、だが彼の小説にそれが全然ないとは私の黒い目が承認出来ぬところである。その爲には私は敢て言ふが、彼に今よりもつとの無邪氣を要求するものである。彼は、人も言ふ如く、随分出精して、無駄をしりぞけ、所謂筆を惜むの努力は重々認められるが、同時に讀むものに彼の藝を感伏させようと餘りに苦心するの結果、それが私が前の節に述べたやうに應々理由のない讀みづらさとなり、獨り合點となるところの弊に陥る、彼の藝術が往々せましくなり、窮屈になる所以である。無論諸々の名人は一度は皆この境を通るものであるかも知れない。

却説「中央公論」所載の譯作「川波の音」を讀んで見る、そして私がざつと今迄讀んで見た諸家の新年小説の中に於いて、この小説は優等の位置を占むべきものであることを認めらる。

成金の五十年輩の男が僅の暇を偷んで、馴染の藝者と店の者たちを連れて、二三日がけの旅の一夜、箱根の宿で泊つて川波の音を聞きながら、思ひ出すともなく、思ひ出させるとなく、一緒に連れて來てゐる彼の持物の藝者と彼との關係を主として、彼の過去や、彼女の朋輩藝者とその旦那との事などを、寸分のすきもなく巧に織交せて現はされてある一篇の趣向は、決して新しいものではないが、無論一口に言ふと、文句なく、結構な佳作であると推選することが出来る品である。唯一寸思ひ付いたまゝに言ふと、「筆を惜む」作者に似合はず、文中に「彼の心は「秋」のやうな寂しさと、「刈田」のやうなもの足りなさはあつた、そこから釣瓶落しの「夕陽」のやうな苛ちも、幽かながら湧いて來ようとしてゐた、」などといふ文句があるのは、洒落た文句であるかも知れないが、そして一度考へついたら一寸捨てられない文句でもあらうが、餘の作者ならいざ知らず、藝道の爲に精進これ事としてゐる譯の小説にあつては、捨て、しまつて惜しい文句ではあるまい、などと言ふ私は餘りに洒落を解しない者であらうか？

だが、何と言つても「川波の音」の中に書かれてある、老成金男瀬田の心理描寫は、流石に文壇無二の鋭い筆付で、作者の頭の良さを少し見せびらかし過ぎるかと思はれる程、まざくくと現はされてゐる、この所、正に名匠が腕に蹠をかけた藝の見せ場を感じさせられる。そして、私が私一箇の興味から言ふと、殊にこの文章中、瀬田が自分とはすつかり遣り方の違ふところの、彼の持物藝者の朋輩の藝者の旦那、西山を羨望するあたり、瀬田と西山との相違した遊蕩ぶりを表現してあるあたりは、掛値なく私の喝采して讀んだところである。私には、この作者はその文字を手控へる流儀に反して、その所謂小説中の人物の心理を描くに當つては、殆ど腹に一物を藏することなく、吐きつくすの概があると見える。さて、私の注文としては、未だ、未だ作者も年四十に満たぬのである、何も完成を急ぐことなく、三つに一つは、「地獄」のやうな試みをする餘裕があるならば、縦横無盡に、無邪氣に、作者自身にとつては少々出鱈目と思へるやうなことでも、書き飛ばすやうな作をして見せてくれるかどうか？ 彈ほどの駿才のことであるから、恐らく、彼が削り捨て、惜

み蔽うてゐるものに、吃度、もつと色々結構な方面があるに違ひない、さういふものが現はれるに違ひない、と私には思へてならぬのである。——此篇、病氣の爲一二日休載の後少々急ぎ執筆、御免。

一 芥川龍之介に就いて

「龍之介から彈へ」彈から龍之介へ、などと坊間の噂の種になる程あつて、何と言つてもこの兩人は若年ながら、何々國の住人、何々流武術の開祖として、遠近にその人ありと知られてゐる、それぞれ一流一派の達人に違ひない。これを講釋もどきで言ふと、一方が四谷何々町に住居する新泉流の開祖人間社の指南番、心理描寫免許皆傳、里見彈と呼ばはれば、我こそは田端何々山に立籠る、新思潮派の四天王、我鬼窟の指南番、新技巧免許皆傳芥川龍之介と應へて名乗り得るものであらう。

閑話休題、そこで「改造」所載の龍之介作「秋山圖」と言ひ、「中央公論」所載の同人作「山

鳴」と言ひ、私の讀んだところ、それ等はこの正月に發表された濟々たる諸家の作中であつて、押しも押されもしない、上席の位置を主張し得るものであることを私は認める。大體に於いて、この作者は今迄の成績から辿つて見ると、この「秋山圖」に出て来るやうな、支那の豪い畫家たちとか、「山鳴」の中のトルストイとトゥルゲネエフとか、或ひは鼠小僧治郎吉とか、キリストンパレン人とか、羅生門とか、さういふ聞いたゞけでも讀者が相當に好奇心を起したり、色々の背景を思ひ浮べて想像を逞くすることの出来るやうな題材を持つて來ると、間違ひなくそれ等を鹽梅して、隙間のない技巧と、打てば響くところの何かの金屬のやうな文章とで、實に見事な組立を以て一篇の小説を仕上げる腕を持つてゐる、これは最早や龍之介の「家の藝」になり了せてゐる觀がある。謂はゞ彼にとつては家傳何々の樂と言つた風なものを調合するのと同じことに違ひない。但しその家傳たるや、彼の場合にあつては、何も親や先祖から譲られたものではなくて、彼自身が發明したものであるのだから、功勞は彼にあるのは勿論だが、だから私は今も一流一派の達人といふ尊稱

を奉つたのである。例へば彼が「秋山圖」をこしらへるに當つては、それを支那らしくする爲に、先づ漢文で書き下ろして恰もそれを翻譯したやうな恰好の文體に仕上げてゐる事や、又「山鳴」の場合では一度露西亞語でゞも書いて、やつぱりそれを翻譯したやうな形に仕上げてゐる用意など、をさをさ才人の技巧の考案至れり盡せりといふべきである。無論彼のことであるからどんな流儀の作をする場合にしても、易々と書き流すといふやうな事はなかに違ひない、が、流石に馴れて手に入つたこの種の作に於いては、多少安心した餘裕の氣分が見える。私は彼の演説を兩三度聞いたことがある。その演説の最中に彼は少し安心して來ると、すほりと一つ警句を吐いて、その瞬間きゆつと口を噤んで空嘯いて澄ました形をするのを見た、即ち彼はその作に於いても、このきゆつと口を噤んで空嘯いて澄ました形をして、どんなもんだい、といふ見えを切る、彼の反對者が怒る所以である。

閑話休題、「秋山圖」に於て、その末段の細工が多少粗末になつて幾分の籠のゆるんでゐることや、全體の作者の意圖が少しぐらくしてゐるといふ難や、まあそれ等の少々の缺

點はあるとしても、一體さういふ秋山圖といふ大した畫家のかいた素晴らしい繪が實際にあつたのかなかつたものか、それは私のやうな無學な者はあづかり知らないことであるが、この小説に於いて作者龍之介が一寸一筆筆を呵して、秋山圖といふ繪を文字で書いて見せたやうなところ、それを神祕の霧で封じ込めた手際は、彼のキリシタン類小説の中の逸品と並んで、中々特色ある、眞似の出来ない小説を物したものである、と私は感心したものである。

が、私がこゝで言ひたいと思ふことは、賞めるばかりが友人に對する禮ではあるまい、彼はこの種の、私の所謂家傳流の完成された作品に時々安んじてゐられなくなつて、例へば「秋」とか「お律と子等」とか、或ひは「妖婆」とか、(私はこの作をも後者の部類に入れるものである、)の、類の違つた小説の方面に飛躍を試みることである。そして、人々はそれ等に對して何と言つてゐるかは知らないが、私の見るところではこれ迄の成績から言ふと彼は悉く失敗してゐると私は斷定するものである。私が若し小説裁判官ならば、一も二もな

く彼の前者の類の小説には屢々優等點を授けることがあつても後者の類には極言すると未だ及第點が辛うじてあると思ふことである。そしてそれにも拘らず、私はその屢々失敗の飛躍を試みるころの彼を、大いに歓迎し、それあるが故にやつぱりこの男悔るべからざるものがあると尊敬するものである。試みに一例を「お律と子等」ととると、その作の出來榮えの不成功にも拘らず、そこに現はれてゐる作者の苦心慘憺たる計營の跡は、私たち同じ小説に浮身を窺す者にとつて、殆ど涙なしに、襟を正さずに見ることが出来ない程、精進潔齋、眞に一刀一拜して佛を刻む抵の、彼の姿を見ることが出来る、これは確に小野道風を感嘆させたころの蛙の類である。そしてあの蛙の如く、三度目か五度目か、到頭枝に飛びついた時、わが芥川龍之介は何と又一段進んだ龍之介になるであらう、と私は今日既に一家をなしてゐる彼に向つて屋上更に屋を架して、彼の前途が展開される日のあることを信じ、且つ望んで止まぬものである、と云爾。

一 相馬泰三と批評家

二七〇

相馬泰三といふ作家は現今の文壇に於いて變な位置を占めて存在してゐるやうに見える。彼は當今の所謂青年、或ひは中堅作家の仲間では随分古參の方であるにも拘らず、嘗てとんとこれといふ程の名聲を擧げたことがないが、又不思議に、そんなに長い間ほつりほつりと、人に忘れられたやうで忘れられずに、一寸蝸牛と言つた體裁で文壇の片隅に、随分の大雨や大風の翌日でも、もう居なくなつたか知らと思つて行つて見ると、やつぱり小さい殻の中に身を守つて小さく存在してゐると言つた形である。さういふ有様であるから、さだめし書生批評家や何かから随分輕蔑されてゐるだらうと見ると、案外さうでもないやうなのである、思ふに、實は一寸蝸牛流に正體が分らないものだから、彼等はうつかり輕蔑も出来ないまいに、多分黙殺と言ふことにしてゐるのだらう。何故と言つて、稀に一部の相當な文學者の中でも、泰三には何處か藝術家らしい面影がある、面白いところがある、などと云ふやうな噂があるので、それが彼等を脅かすのでもあらうか。

だが、今更言ふ迄もなく、當今の文壇に於いて、數へて見ると相當の頭數はあるやうだが、兎に角批評家と呼ばれてゐる人々ほど文學が分らなくて、従つてその職業に不忠實で、偏頗で、かと思ふとお座なり式で、不正直な者は、外に多くその比を見ない、といふ私のこの言葉は決して大擱みな物の言ひ方でも、不川意な言説でもないつもりである。早い話が一小説家泰三が閑却され、と言つて泰三その人は破滅もせず或ひは發展もしないといふそのお尻を、私は三分は批評家の責に負はしたいものである。何故といつてどうして數多い批評家の中に一人位泰三の藝術に反對する者や、贊成する者や、應援する者や、或ひは敢然として忠告する者ぐらゐらないのであるか？ 諸君はそれ程常に重大事ばかりを論じてゐる忙しい身でもあるまいではないか？ して見るとやつぱり諸君には一小説家の二作風さへ味はふの能力がないので、誰か人が論じ合つたところの、大方見當が付いてゐる作家ばかりを論じ、時々外國などのものと複雑した作家に就いて豪さうに論じることがあるのは、

あわは結局それ／＼手本や解説に依つて論じたり真似たりしてゐるのだらう。現今の批評家は其の獨創とか簡性とか、つまり自分自身の物の見方などいふものは、總て惡魔か神様に預けて來たのか、と痛くない腹をさぐられても仕方がないことである。

さうは言ふものゝ、我が相馬泰三にしても、珍らしがりの文壇のことであるから、書き始めの頃は「早稻田文學」あたりで、やれ露西亞的だの、やれアルツィバアセフを思はせられるだの、やれ貴族的だの、やれ新浪漫主義者だの、と多少は騒がれたことがあつたやうに私は記憶する。あゝ、人の心の頼みなさよ、以來年月僅に四五年の間に、それ等の賞め言葉の大半は、今や非難の際の言葉に使はれてゐる。言葉にもし靈があつたなら、彼等から決闘を申し込まれる批評家の數は知れぬことであらう。空言は傍に於いて、白狀すると私はその當時からこれ等の泰三の批評家の言を甚だ輕蔑してゐたものである。成程、例へば彼の出世作「田舎醫師の子」を見ると、何處か日本譯「サニン」とかその他露西亞の翻譯小説に、文章の調子とか、表現の仕方などに似たところがあつた、無論意識してか、無意識

にか彼がそれ等を真似たのであらうから。それから又或作では變に貴族的だと言へる點も、新浪漫的だと言へる所も認められた、だが、私の見るところではそれ等は末の末のことで、文學は肩章に依つて軍人の階級を見るやうには見られぬのである。さて、今月の「新潮」と「小説俱樂部」と「女の世界」と「童話」とで彼の四つの作を私は讀んだのである。……

一 相馬泰三の作風

相馬泰三がこの年頭に發表した短篇脚本「煙」(「新潮」所載)を讀んで見ると、或日のことで、一つの鐵砲屋に同じやうにそれ／＼ピストルを買ひに行つた三人の人物があつて、二人が兎で一人が女で、そこで三人連れ立つてとあるカフェーに出かけて行つて、どうしてそれを買ふことになつたかといふ因縁話をする、そして終に三人がてんでにそのピストルで自殺するといふ一幕である。而も斯ういふ私の筋書の方が餘程鮮明な位で、一體その人の女といふのが一人の男と關係があつたものか、それを他の男が横から女を寢取りでも

したものか、何の事やら読む者に一向合點が行かないのである。まして何故三人が今し方買つて来たばかりのピストルで、ボン／＼と人形のやうに他愛もなく自殺して倒れるのか、それ／＼煩悶があつてか、狐憑きでもこんな事にはならぬものである。一體それはどう言ふ譯だ、さつぱり分らないぢやないか、と作者に抗議を申し込んだら、ふんと言つて、彼はあの變な皮肉な顔を歪めて笑ふかも知れない。だがよく考へて見ると、作者自身もさういふ筋には少しも重きを置いてゐなくて、彼自身も何の事だか知らないのかも知れない、とさへ私には考へられる。現にこの同じ作者の童話を讀んでも屢々斯ういふ經驗を嘗めさせれることがある、何の爲にさういふ事件が起るのだが、どうしてそんな突拍子もない話に移るのか、全く分らないやうなものに時々お目にかゝる。だが、こゝで何の事だか分らぬと貶したり、鬼に食はれてしまへと吐つたり、或ひは黙殺してしまふのは、先に言つた現今の批評家の仕事で、私はもう少し作者の爲に考へて見たいと思ふ次第である。そこで考へて見るのに、同じこの作者のもう少し文壇で好評を博してゐた時代の比較的筋の立つ

てゐた、作者の企圖の察しられる某々の小説類にしても、この「煙」とか、同じく今月の「女の世界」所載の「二夫婦」とか言ふ類の、読む者をしてとんと狐につまゝれた様な、何を書かうとしてあるのだから、隠れた意味が含まれてゐるのだから、或ひは何にも含まれてゐないのだから、分らないやうな類の作品にしても、そこに共通して流れてゐる一貫した何かがあるのである。そしてそれは嘗て早稻田文學記者が言つたやうに、露西亞的でも、アルツィバアセフの流でもないものであることは、重々無論の話である。諸君は嘗て森鷗外が譯したところの、シュニツラア作「猛者」といふ脚本を讀まれたことがあるか、あの中に一人の人物が二階の窓から飛び下りると、他の人物がその後から飛び下りて、先に飛び下りた人物を、彼が地面に落ちない前に途中で拾ひ受けるといふ場がある、考へて見るのに、同じ脚本でも、これは人間の役者は使へない、あやつり人形でなければ演じられないものである。ところで「猛者」の作者はいざ知らず、泰三はこのあやつりの興味に力點を置く作家である、と私は考へるのである。

考へて見ると、彼の初期時代には、何でも世の中が退屈で、つまらなくて、それもどうやら自分の罪ではない、世界がそんな風にいびつに出来てゐるのだ、と言つた風な考へがどの作にも書かれてあつたやうに思ふ、近頃のは何だか厭に夫婦問題といふやうなものばかりが取扱はれてゐるやうである。だが、注意すべきことは、普通の作家にあつては、さういふ問題がある時には作の中で大きに調子を強めて語られるものであるに比して、彼の作にあつては、それが何か別の、つまり彼獨特の工夫の小説(私の所謂あやつり人形小説)をこしらへ上げる爲の、ほんの道具の役廻りにしかなつて居ない事である、そして近頃になつてその傾向が益々ひどくなつて来て、斯くの如きいびつな小説が製作されるのであらう、と私は考へるのである。現に彼の比較的好評を博した「田舎醫師の子」にしても、又私に比較的好作であると認めて居るところの「荆棘の路」にあつても、作中の人物がやつぱり妙に人間が人間らしくなく、而もそれが下手な作家が人間を描かうとして人間らしく描けなかつたと言ふのは違つて、それが如何にも作者の始めからの計畫らしく、それを芝居

で言ふと役者に人間を使はずに、西洋式のあやつり人形を使ひたかつたのだ、といふ風に見えてならぬことである。だから、前者の中でも主人公が父の家に歸つて行つた時に、パタンと玄關の扉を開けるところとか、馬に乗つて走る光景とか、そんなあやつり人形的なところが最も讀者の頭に残る所以ではなからうか。更に彼の作の中の人物は、どれもこれも、實にハイカラなそして巧な、言葉を交してゐることである。がこれも亦普通の作者の所謂うまい會話などといふのと違つて、あやつり人形に使ふ聲色に、作者が翻譯文學を耽讀して得來つたところの知識から、苦心に苦心して案出したもの、やうに私には受取られないのである。何とも實に不思議な心掛の作家である。

二童あり、と私はふと少年の頃に讀んだ漢文の文章を思ひ出すのである、二人の童子が故郷の往還の橋の欄干にもたれて立つてゐる、二人は共に神様から平凡でない才智を同じやうに貰つたのである、だが一人は金持の子で、一人は貧乏人で、段々成長すると共に一人は金持と附合つて、名高い學校に這入り、一人は旅から旅を轉々して立派な先生につく

事も出来なかつた、そして、一人は幸運の順風に帆掛け、一人は日陰で辛うじて蕾のまゝ、花咲かなかつたといふ話である。これは譬へ話であるが、私は今日もつと盛名を馳せてゐる作家よりも、泰三が少ない才分を持つてゐるとは考へられぬものである。のみならず、藝術道に出精する事に於いて、彼は決して人後に落ちない者であることを知つてゐる。されば、蝸牛のやうに片隅に小さく閉ぢ籠つて、長年藝術の爲に、一心不亂に、凝つて凝つて凝り抜いた結果、さて斯くの如く思案に及ばぬものになつた彼の作品に、私は一片の敬意を表する事を忘れないつもりのものである。そして自然ひねくれた考を加へたり、可笑し味を付けて見たり、例へばそれを一つの病と見立てれば、病は次第々々に膏盲に這入つて中味の全然ない仕草ばかりのものを考へ出して見たり、譬へられる正體のない譬話のやうなものを作り出したり、斯くて今見る如き彼の作に對して、私は相當の同情の目を持つてゐるつもりのものである。だが、何にしても今の状態では斷然いけない、そこで、あやつり人形流を中途の挫折に屈せず發展させるか、いづれは眞正面から物の言へないこの作

者のことだから、もつと徹底して、おどけたり、飾り立てたり、噓話に磨きをかけたなり、譬話に思ひをひそめたりするか、それともそれ等をすつかり止めて、新しく勳八等から出なほすつもりで、その名文章と、翻譯文學の知識（それは決して輕蔑せらるべきものではない）を以て、「Y—驛附近」流の、否、あれよりもつと一皮正直になつた寫生文からやり直すか、何と、何と、相馬泰三？（十年一月、時事新報連載）

一 岡本 一平

岡本一平の漫畫は随分以前から、多分彼が漫畫をかき始めて以來、ずつと私は喜んで見てゐるものである。が、その漫畫とそれに附けられた文章とを屢々見てゐるうちに、いつからとなく私は、その畫や文章に現されてゐるよりも、作者その人は更に一段面白い人物ではないかと考へ出されて來た。言ひ換へると、この畫の才とこの文章の才とは無論並製のものではないが、それに依つて現されてゐるだけが、まだまだこの作者の全部のもので

はないといふ考である、近頃のはやり言葉でいふと、つまり岡本一平はその藝術に十分自己を出し切つてゐない、と氣がついたのである。だが、こゝで、私の考に依ると、眞に人の爲す事はその顔の形の違ふ如くに様々で、或人は自己を十二分に、どうかすると他人の着物を借りて来てまで現はさうとするし、又或人は自己をいつも半分隠して半分しか現はして見せないし、或ひは公衆の前で正面を切つて俺は斯う斯ういふ眞面目な者であると吹聴する傾向の人もあれば、又偽善者の如く町角や廣場で祈をして見せる人もある。さては又懺悔をして溜飲を下げる性質もあれば、さうして冷汗を流す氣質もある、どれがその中でどれ程神様の御意にかなひ、どれが又どの程度まで神様の御意にかなはないか、それは今にはかに斷言し難いが、こゝに私がはつきり言へることは、わが岡本一平は物を言ふのに、決して正面を切つて言へる人間でない、といふことだけは確である。

その後私は、たしか一二年前の「中外」だつたかに彼が書いた「續泣虫寺夜話」といふものを讀んだ時、その時始めて彼の纏つた文章を讀んだのであるが、これは畫と違つて私の專

問に屬することであるだけ、私は一層興味を持ち、そして驚かされたものである。私が常々思ふには文章の遣り方の巧妙さに於いて、この人と大泉黒石とは、現今の小説壇にもつて來ても、三流作家は無論のこと、一流作家の間に伍して、決して遜色のあるものではない。さう言へば、無駄口を叩くやうであるが、故の夏目漱石の文體の影響を受けてゐると迄この兩人には似てゐる所がある。更に文章ばかりではなく、小説家的な物の見方に於いて、この兩者は又決して三流作家の亞流ではない。そんなら、文章も、そして觀察も、そんなに迄小説家の道具がそろつてゐながら、而も彼等の作が小説でないといふ譯は、誰がそんな事を言ふのか？ 實は私自身がさう言ふのである。さあ、それは何と説明するべきか、實は私にもはつきり言へないのであるが、そして、そんならどんな定義にはまるのが小説で、どういふのが非小説であるかと詰問されたら、さあ、さあ、さあ、と私は忽ち芝居の悪者のやうに閉口しなければならぬのであるが、そして又何も小説とはそんな範圍の狭いものではないことは私も重々認めるものであるが、今もし小説にでもやは

り格といふやうなものがあるとすると、彼等のそれは變格のものではなくて、正に破格のものである、と私には思へるのである。だから、或ひは彼等の文章が小説として全盛になつて來たら、今日の小説が皆破格になつてしまふのは、無論明らかなことである。ついでながら、私の見界では、長谷川如是閑がこの中に這入るのである。

と、斯うは言ふものゝ、私は彼の「續泣虫寺夜話」を読んだ時は、文字通り、感嘆これを久しうしたものである。こゝに於いて、破格でないところの現今の多くの愚作小説よりも斯ういふ優等な破格小説の方が、どれ程私には面白いか知れない、と私は言ふことが出来るものである。但し、この「續泣虫寺夜話」に私がこんなに推選の辭を呈することは、多少割引して聞く必要があるかも知れない、何故といふのに、それには私自身の経験から、私が最も共鳴する筈の事件が取扱はれてあつたからである。と言ふのは、それは一人の男が激しいヒステリー性の細君に惱まされる話で、今はもうその話の筋道は忘れたが、何でもその主人公は毎晩床に就く時に、今夜こそ細君が夜中に突然ヒステリーを起して、氣が變

になつて、自分が寢込んでゐる最中に、突然小刀かピストルかで殺しに來はしないか、あ今夜こそ、今夜こそ、明日目が醒めたら墓の下へ行つてゐるのぢやないかな、と心配しながら、それで毎朝起きて顔を洗ふ時、洗面所で自分の首を觸つて見て、それが胴體に確についてゐるのを確めては、まあ、今日一日は無事だつた、と安心すると言ふやうな事が書かれてあつたと記憶する。その挿畫に作者一平の畫として、前景に一人の男が自分の首を両手で撫で廻してゐるところ、そして右手後方に、如何にもヒステリーらしい女が、向ふ向きに大きなお尻を此方に向けて、机に向つて何かしてゐる圖があつたのをはつきり覚えてゐる。これは作者一平の實際の経験の話か、それとも全くの架空談かは知らないが、前に言つたやうに私にはそれに似た實際の経験があつたので、殊に沁々共鳴を感じたのに違ひない。だが、さういふ私一箇の興味をさしおいても、尙且、無論この作が優れたものであることを、私は證明するに躊躇しないのである。

ところが、何よりも注意すべきことは、その作に於いて、彼は無比の才筆を驅使して、

細君がどうしてどんな風にヒステリーを起したか、どうしてどんな風に男が困つたか、といふ事を決して正面からむきになつて書かずに、例へば今言つた毎朝無事に胸から切り離されることを免れたところの、我と我が首を沁々といと惜しむ状態などを事細かに記してゐる、そしてこれは或種の短見者流の言ふやうに、誇張であるとか、不眞面目であるとか、嘘であるとか、言ふべきものではないと私は思ふのである。誇張か、嘘か、不眞面目か、それは文學に於いては或種の短見批評家流のやうに形で見るときものでなくて、讀んで心に感じて見るべきである。だから正直な讀者には直に分ることであるが、兎に角、一平はさういふ見方をして、さういふ感じ方をして、さういふ書き方をする作者に違ひないのである。それが我れ人に獎勵すべきものであるかどうかは暫くおいて、古來賢い、併し出家もせず、行脚にも出なかつたところの、或種の日本人が、殊に都會に生れて都會に育つた、賢い、或種の日本人が屢々採り、或ひは陥ちたところの道である、一平は斯ういふ人物だつたのか、と思つて私は讀んだことである。

この作の主人公の身の上が、實際の一平の身の上であるか、それとも架空の話であるか、その何れにもせよ、この男の物の考へ方なり行ひ方を以て、作者の一平を律しても大した不都合にはなるまいと思ふが、すると、彼はその度し難いヒステリー病の細君に對して、不平をも、憎みをも、或ひは彼女を強ひて追ひ出さうとも、又はさういふ境遇になつた自分の身の上を嘆かうとも、何とも感じてゐないらしいのである。だが、さう言ひ切つてしまふと、即ち私も短見者流の見界を追ふことになるから、もう少し詳しく言ふと、實は彼はそれ等のことを十分に感じ過ぎた結果、この小説の中に書かれてゐる男のやうな、如何にも逃避したやうな、或悟りに這入つたやうな、態度なり考へ方なりをするものになつたのではないか、そして、それが私に言はせると、決して新式のものではなく、先にも言つたやうに、古來の日本の賢い市井の隠者たちが取つた態度と同じものであると言ひたいのである。見來つたところ、世の中は味氣なくて、馬鹿氣てゐて、つまらなくて、そして難儀で、要するに住みよいものではない、さらば何とするか、それを改造するか、自分自身

を改造するか、それとも自殺でもしてしまふか、さあさ、何でもよいわいな、かつほれく、甘茶でかつほれ、沖の暗いのに白帆が見える……あすは旦那のいねかりに、こたばにからけて一寸なけた、……なけた、サツサ、枕にとがやない、をせせのこれわいさに子が出来た、このなんでもせ……といふやうな事になつてしまふのである。

果して「續泣虫寺夜話」の第二章目には、主人公が梅坊主のところかへ、踊を習ひに行く一段がある。随分前のことで、而も讀者の私の境遇がどういふ場合だつたのか、極めてそくさと讀んだことなので、今ではその筋道をすつかり忘れたが、何でもそれから梅坊主が踊に就いて講釋するところがあつたかと思ふと、さて師匠に連れて弟子たちが踊り出すといふやうな場面もあつたやうに思ふ。或ひは全然私の思ひ違ひで、そんなものはなかつたかも知れないが、兎に角、私の記憶ではその師匠の踊に就いての講釋に、その主人公が可成り感激したらしく、作者もその所を殊に叮嚀に説述してあつたやうだつたが、その師匠の言ふところに依れば、かつほれ踊の心持は中々奥行が深く、並々ではない修業が入

るものであると述べられてあつた。さうだらう、かつほれ踊だつて深川踊だつて、それをやるものは當今では多く邪氣に満ちた雑妓や、不貞腐れの賣女や、淺墓な遊蕩者にのみ流行してしまつて、心ある人の近づくべからざるものになつてしまつたが、しかし又心を空しうして、それが如何なる賤しい者に、如何に拙劣に踊られてゐるにしても、我々日本人が見てゐると、あの譯の分らぬ文句の連續の歌の調子にも、可笑し味たつぷりな手足の運動にも、たゞでは看過ごされない何かを含んでゐるのである、謂はゞそれは日本人獨得の憂鬱と、あきらめと、悟りとの心を語るものゝやうに思はれるのである。だから、物分りがよくて、世の中が餘りに平凡で、つまらなくて、馬鹿けてゐて、骨折甲斐がなくて、そして愉快でなく見えるところの、「續泣虫寺夜話」の主人公の心をそれが動かしたのは重々當然のことに違ひない。このかつほれの心意氣が彼をして難儀なヒステリーの細君に悩まされながら、毎朝胴に無事についてゐる首に感謝し、それをいと惜しむやうな、そこに何處かゆとりのある心境を持ち來したものが、さういふ難儀な境遇がかつほれの心意氣に

救ひを見出したのか、さあ、それはどうでもいゝとして、最後に結論として、私から彼に注文したいことは、元より人間のこと、親でも子に注文することは結局無駄な話であるが、假りに注文するとすれば、彼ほどの文章とそして物を見るの才分を併せ持ちながら、文學語で言へば現實を回避する傾向を暫く傍に置いて、つまりそんなにこの世の事を投げないで、もう少し辛抱して見て欲しいと思ふのである。殊に、彼の五行か六行の漫文からも十分、窺へることであるが、彼は随分いろ／＼な物の本を讀んでゐる人と見える。恐らく江戸時代の「醒睡笑」「咄の安賣」「輕口浮瓢筆」等、等、の落語本から、トルストイ、ドストイェフスキイの小説から、マルクスの書物から、「正信偈」から、手當り次第に相當の興味と理解とを以て讀んでゐる人であらう。そこで、我田に水を引くやうなおちになるが、勉強して時々又破格小説でも變格小説でも、何でもいゝから文章を書いてほしいと心から私は望むものである。でない、岡本一平は、彼一流の逃避法で、漫畫に逃げ、かつほれに逃げ、野狐禪に走つたもので、彼の悟つたやうな態度は決して積極的なものではない、

などと悪口を言つて廻りますよ、とまあ、そんな冗談は止して、私は實際現代に於いて、彼が押しも押されもしない一流の達人で、一流の人物であると認めるものから、少しばかり遠慮なく、中央美術記者の乞に任せて、早々の間に書き流したので、甚だお粗末なものであるが、以上一文を綴つた所以である。諒焉。(十・二)

葛西善藏論

僕は文學の中でも、常々脚本と共に評論といふものを餘り好かない。心掛として常日頃から評論だけはしたくないものだと思つてゐる者である。而も新潮記者の注文の、その評論の對象が人もあらうに葛西善藏といふ、僕などとはその傾向から言つて、南と北と程の違ひのある人物なのには少し困つた。が、そこは文學といふものは有難いもので、そんなに違ふ人の作物をも大いに享樂する事だけは出来る譯であるが、實を言ふと、それと共に彼の作物にも人物にも、どうしても僕などの窺ひ知るべからざる所も大いにあるのである。若しこの一文の讀者で、圖々しい奴だ、こんな葛西善藏論つてあるものか、と抗議を申込む人があつたら、さうですか、濟みません、だが、こんなものしか僕には書けないのですとあやまる外はない。

そんな譯で、この一文を以て大いに葛西善藏を啓發しようとか、或ひは彼の文學と共に後世に残すべき評論を書かうといふ心は、僕毛頭抱いてゐない。唯、雜誌記者の口車に乗せられて、けふ讀んであす捨てられる月刊雜誌に、讀んで餘り肩の凝らない無駄話を書くつもりで、やつて見ようといふのがこの文章の主旨である。序ながら、その罪滅しといふ譯でないが、葛西善藏論といへば本誌(新潮)四月號の葛西善藏の印象といふ欄の中にある、舟木重雄の「原始哲人の面影」及廣津和郎の「『正直爺さん』の強味」といふ兩箇の文章こそは、僕の見た所、葛西善藏論として、殆ど完璧に近いものである事を、まだ讀まぬ人に知らしておきたい。要らぬ世話を焼くやうだが、僕のこの文章を讀んで、これはいけない、この高名な、特異な作家に就いて、もつとしつかりした、要領を得た論文を讀みたいものだと思ひ立つた人があるなら、僕は眞面目に是非右の一文を一讀されん事を望むものである。

却説、バイロン卿に「目醒むれば、身は一朝にして大英國第一の詩人」といふ壯快な言葉

があるが、斯ういふことは由來藝術家を除いては、せいふく相場師位なもので、他の堅氣の職業には滅多に見られない現象である。例へばこれを他の職業に當て嵌めて見ると、巡查が一足飛ひに警視總監になつたり、下役の會社員が出張先から歸つて來るなり、忽ち重役に昇進したとかいふ類の者で、そんな話は夢より外にはないのである。ところが、それが、文學界となると、敢て英國三界を探さなくても、斯ういふ例に決して乏しくない。と言つて又、誰もがさうだといふ譯には行かないやうである。才人佐藤春夫を以てしても、この一朝にしてと云ふ素晴らしい幸運には、中々容易に廻り合さなかつた事は、皆人の知るところである。それどころか、彼などは屹度毎朝目醒める毎に、今日はどうだらう、明日はどうだらうと、この幸運に定めし催促狀を出したに違ひない。言ひ換へると、各々の自信ある文學界の才人等は、皆この一朝を樂みに、好きで踏み込んだ泥水とは言ひながら、憂き艱難を忍んで、晴れた目醒を待つてゐるといふものである。

わが葛西善藏も亦その例にもれない。彼の「贋物さけて」は雑誌「早稻田文學」に送つてか

ら、やうやく六ヶ月の後に拾ひ出され、又「子をつれて」は一度「新公論」で斷られ、「早稻田文學」に持ち込まれてから、又三四月の後、漸く世に出されたものである。久米正雄がこの後者に名作といふ讃辭を呈したのは、それから又四五ヶ月も後のことであつた。これは僕の考では、決して雑誌編輯者の無能を指すものではなく、手取り早く言へば、まだ作者に運が向いて來なかつたのである。さういへば好んで暗がりの事を明るみへ持出す様ではあるが、彼が「贋物さけて」を二ヶ月とか掛つて故郷で漸く書き上げた後、在京の友人に宛て、何處か雑誌にやつてくれないかといふ手紙を附けて送つたところが、何ヶ月かの後にふらりと原稿だけが、故郷の彼の所に郵便で歸つて來たといふ話がある。これも僕の考では、決して彼の友人等に不明の罪を被せらるべき筋のものではなく、運がまだ彼に向いて來なかつたのである。さうして長い間實生活上の難儀と、藝術上の苦勞とのありたけを盡して、彼には珍しいことではないが、去年の今頃のことだ、彼は這々の體で故郷をさして歸つて行つた。その時、彼は友達にこしらへて貰つた金で、漸く切符を買つた迄はよ

かつたが、終列車に乗り遅れて、宿に泊れば途中の辨當代がなくなるといふので、夜もすがら東京の町を歩いて来たといつて、朝の四時頃に僕の寢てゐる下宿にやつて来た事がある。

そんな風にして彼が故郷に歸つてから、二ヶ月も後の或日のことであるが、僕は町でふと或友人に會つた、彼が言ふのに、先日「新小説」の編輯者に會つたら、葛西善藏の小説が出来たら貰つてもいいといふ様なことを言つてた、とのことであつた。僕は早速その事を故郷なる善藏に傳へると、直彼から返事が来て、是非書きたいから何分話を進めてくれといふので、僕も早速その友人にその事を言つてやると、彼の返事に「新小説」の記者の曰く、何分新進の作家の事だからいついつ迄と日を定めて、却つて拙いものが出来る様な事があつては、お互によくないから、日を定めない、氣に入つた自信のあるものが出来たら、貰つてもいいといふ話だ、と言つて来た。そしてそれが「遁走」一篇なのである。ところが、それから二ヶ月後に發表された「泥沼」は、同じ記者が毎日毎日電報で故郷の彼に打つて、

未完のものを無理に送らせて掲載したものである。この記者の言葉をそのままに参考すると、彼は二ヶ月足らずのうちに、葛西善藏を新進作家から、一躍して大家扱ひにした譯である。僕は、だが、これをしも無定見の記者だといつては嗤はない。

それよりも前のことである。或日僕、江口渙を訪ねた時に、君は早稻田々々と見くびるが、と大いに彼の向ふを張つて、早稻田方に味方をしたつもりで、僕、「早稻田の方にも葛西善藏といふ作家があるよ、」と言ふと、彼、「評判は聞いてゐるがまだ讀まない、讀んで見たいものだ、」と言つた。そこで、暇な僕は早速故郷にゐる善藏に手紙を出して、彼の作の切抜を送らせ、それを渙へ届けたものであつた。江口渙はそれを讀んで可成り感心したと見えて、それを菊池寛と久米正雄とに貸したさうである、そして寛も正雄も亦大いに感心したさうである。そこで、右の三氏の「葛西善藏合評」といふものが、帝國文學に載せられるといふ運びにまでなつた。もつとも、これは途中で都合あつて止められたが、その後渙だけが雑誌「雄辯」に新進作家として善藏を紹介する様になつた。これが徑路である。

けれども、恐らく故郷の山の中にある葛西善藏は、やつぱり少しもさういふ出来事を知らなかつたに違ひない。先の筆法で行くと、彼は「一朝の目醒め」の爲に、山の中で眠つてゐたといふ事になるのである。東京では既にA雑誌でもB雑誌でも、葛西善藏の小説を欲しがり始めてゐた。だけど、彼はそんな事とは夢にも知らなかつた、その證據に、年が明けて今年になつてからも、故郷から彼が廣津和郎に寄來した葉書に、何處かに原稿を世話してくれないか、と言つて來てゐた程である。

いやに運命論者の様な口をきくが、運といふものは恐いもので、それが向き始めると不運時代の良い作よりも、劣つた作を書いても、少しも出世の妨げにならない。善藏にしても「……したのだ」……「思つたのだ」……「云つたのだ」などと、無暗に「のだ」止を連發しても、これは面白い口調の作家だと、世間では感心してゐる。一人稱の小説が突然三人稱になつて、急いだ爲か變にごたくして、筋が混亂しても、これは不思議な表現をする、面白い作家だと、やつぱり世間では感心してゐる、めでたしく〜。

こんな事をいつか江口渙と話した事があつたが、その時彼は、俺が葛西善藏を人生派だと言つたのに對して、佐藤春夫は抗議して、藝術派だと言つて「兄と弟」の中の主人公が八郎湖畔の入日の感想を例に引いた、といつたと言ふのは斯ういふ文句である。

その時の歸りに庄作の汽車は、丁度八郎湖畔の邊りで入日の時刻に會つた。空には紫色に輝やく雲の殿堂の數々——それが靜かな鈍色の湖面を染めた。雄大とも崇嚴とも、彼には形容することが出来なかつた。自然の藝術——の大きさ、輝やかしさに、眩惑された。そしてこの自然のそれに一寸でもあやかることが出来るとせば、自分の一生もまた生甲斐のあるものであり、自分の生命も無駄で無いといふことを思つて、彼は慘めな都會生活に歸つて行く自分に新らしい元氣を感じた……

なる程、「兄と弟」の中の主人公は餘程その八郎湖畔の雲に感心したと見えて、同じ小説の中で、まだ二三ヶ所もその雲の殿堂の話をして、自然の大藝術と讚嘆してゐる。

それは兎に角として、僕を以てこの江口渙對佐藤春夫の議論を判断せしむれば、それだから評論はいけない、評論すると、賢明なる事兩氏の如き人をも、ともするとこんな風に片手落な分類に陥らしてしまふので、葛西善藏はその兩氏の言ふ、どちらでもあるのだと僕は思ふものである。

その同じ日のことであるが、僕は渙から彼が嘗て雑誌「雄辯」紙上で、新進作家としての葛西善藏を推薦した一文の切抜を、その時借りて歸つて讀んで見たところが、それに依ると、彼は善藏を徹底リアリズムの作家として、「陰惨な物質生活の爲に重苦しく押し潰された人間の苦しみに對して、少しのまじろぎも見せず、凡ての深い奥底に横たはつてゐる暗澹たる人生の種々相を掴み出して來て、その要所要所だけを簡潔的確に表現する。」と言つて感心してゐる、そして彼は徳田秋聲に多くの類似がある事を指摘してゐる。大體に於いて僕も大いに賛成であるが、唯さう言つてしまふと、葛西善藏が全然、往年の或種の自然主義の作家のやうに、通り一遍の客觀的な作家と見えるのが甚だ遺憾である。僕の見

ところでは、彼は、これから先はいざ知らず、今迄のところ、寧ろ主觀的な、詩人肌の作家のやうである。彼はよく自分の小説を笛に譬へて、これ迄の自分の作は、音色が少しは面白いと思ふが、どうもまだ調子がよく合つてゐない、これからはもつと調子の合つたものを書く心掛だ、といふ様なことをいつてゐる。

彼の言ふ「笛」の意味の穿鑿は一寸傍に置いて、僕は僕の意味でこの笛といふ言葉がひどく氣に入つた。この笛といふ言葉は非常に便利で、どんな例にも適用出来るが、僕もこの言葉を借用して言つて見ると、今の若い小説家の小説は、即ち皆思ひ思ひに各々の笛を吹いてゐる觀があると思ふのである。それが彼等のよい所でもあり、悪い所でもあるが、兎に角面白い所である。殊に葛西善藏は、彼自身が窃に言ふやうに、中々面白い音色の笛を持つてゐて、彼はそれを中々上手に吹く、彼自身は彼自身の意味で、調子が合つてゐないといふが、僕の意味からいふと、中々その調子も手に入つたものである。

そこで、又先の江口渙の論文に戻るが、彼も亦「殊に氏の作品を通じて、最も明確に看

取し得る特性は、題材を形造る事實そのものに對する取捨選擇の極めて的確明晰な一事である。かなり長い間の出來事を出來るだけ壓搾したにも關らず、書くべきだけのものは殆ど書き落してゐないと云つても好い。つまり押へるだけの甲所は悉く押へてゐると云ふ風である。」と言つてゐる。僕、悉く同感である。「押へるだけの甲所」などとは、渙、中々うまい事を言ふ、とつくづく感心した。甲所の押え方は、葛西善藏一家の祕傳に違ひない。祕傳といへば、彼の直話として、彼は執筆中に、作中の事件に没頭して來て、頭が熱して來ると、筆を止めて又翌日氣が靜まつてから書くといふことを言ふ。彼の寡作は有名な話であるが、彼はけふ三行書いて、明日又その續きの三行なり五行なりを書くといつた風にして、そして一篇を仕上げるといふことである。僕、或時、君だつて五枚や六枚時に依つて書ける事があるだらう、と聞くと、いや、さうでない、さう書くと嘘を書く、後で消す様な事になる、と彼は答へた。這裡の消息を多少窺へるに足るかと思ふ。もつとも、僕には作家の斯ういふ點を掴まへて、理屈に布衍する事が出來ないから、これだけの事實を後

の評論家の爲に傳へておくに止めて、さて又先の渙の論文にかへるが、その前の方に、なぞ、と言ふと、無暗に他人の禪で角力を取る様だが、僕の様な言葉では、中々あつさり、と、評論らしく言へないからもう一つ引用させて貰ふと、

たとへば暗い洞穴のドン底に落ちても猶その暗い底に、一縷の光を認めてゐると云ふ様なところがある。而も、その光に依つて自分の運命が如何なるものでもないにも拘らず、猶最後まで悠々自適と云ふやうな態度を採つて、飽くまで潰れて了はずにゐるところがある。これは恐らく遠い祖先以來、飽く迄自然の暴逆に會ひながら、猶且凡てを天に委して生きるとでも云ふ様な東北人獨特の素質に基いたものでもあるのだらう。

これ又、僕は悉く同感である。それで思ひ出したのは、或時秋田雨雀が、葛西善藏の寡作で、乏しい物質生活に甘んずるといふ風は、自分にはよく分る、あれは自分等の郷里のロオカル カラーで、同郷の福士幸次郎などにもさういふ所がある、と言つてゐた。或ひはそんな事があるかも知れない。が、又誰だつたか、そのロオカル カラーを布衍して、

葛西善藏が徳田秋聲に似てゐるのは、國は違ふが同じ北國出だからなど、言ふに至つては、少し可笑しくなつて来る。それは兎に角彼はよくこの大家に擬せられる様である。江口渙もさうだし、加能作次郎も確さう言つた様だが、僕も大體に於いてその事を是認する。

だが、僕の見るところでは、この兩者の似てゐる所は、その作風と言ふよりも、その手法と言つた様なものだけではあるまいかと思ふ。僕、徳田秋聲の小説をさう澤山讀んだといふ方ではないが、その讀んだ二三の小説の記憶に依つても、老手といふのは斯くの如きをいふのであらう、といつてもつくづく敬服したことであつた。今、現在の事を言つてあるかと思ふと、いつの間にか昨日の出來事を述べ、又一寸現在に返り、又いつの間にか數年も前の事に移り、するうちに又現在の事に返つてゐるといつた風で、而もそれが總て要所要所を巧に、少しの煩雜もなく、老練な手法で書かれてゐる所には、つくづく感心したことであつた。善藏亦餘程この大家に私淑したことがあると見えて、さういふやり方をそつくりそのまゝ踏襲してゐる。さう言へば書き出しなども餘程秋聲に似てゐる。そして彼も亦既

に可成り老練で、時とすると秋聲以上に巧みな事さへある。早い話が、先に話の出た「兄と弟」の「一」を見て見給へ。

ところで、この兩者の作に誰でも一見して目につく違ひがある。それは前者の小説が總て三人稱で現されてゐるのに對して、後者のは悉く一人稱の小説である事だ。もつとも、形はさうなつてゐないが、彼の小説の主人公を、皆「私」と書きかへても少しも不自然でないばかりか、その方が却つて自然な位である。その様に後者の小説が結局散文で書かれた主觀的な詩のやうな感じのものであるに比べて、前者の小説はその正反對の感じのものである。

序に言つておくが、僕は今秋聲と善藏の小説がその書き出し迄似てゐると言つた。所が不思議にもその結末は、前者のがその書き出しの如く結末も亦整然としてゐるのに反して、後者のは應々尻切とんぼに終つてゐる。今、一寸僕の思ひ出すまゝを舉げて見ると、「悪魔」もさうだし「質物さけて」も、「哀しき父」もさうだ。どうも大體に於いて、あれ程うまい善

蔵の小説が、いつもその終に於いて少し讀者に飽氣ない感じを抱かせる様である。これは誰もそんな事を言つた人がない様だが、どうも僕ばかりの感想ではないと思ふが、どうだらう？ と或時その事を相馬泰三に訴へると、彼は僕に同感したのか、それとも唯調子を合したのか知らないが、それはつまり彼(善蔵)の「無責任」といふ性質に起因するんだよ、と彼らしい調子で答へた。

相馬泰三といへば、彼はこの四月の「新潮」の葛西善蔵の印象に於いて、「……が、困つた人だ」といふ一文を書いてゐた。又「子をつれて」の中に

……「小田のやうなのは、つまり悪疾患者見たいなもので、それもある特志な醫師などに取つては多少の興味ある活物であるかも知れないが、吾々健全な一般人に取つては寧ろ有害無益の人間なのだ。そんな人間の存在を助けてゐるといふことは、社會生活といふ上から見て正しく不道德な行爲であらねばならぬ。」……

とあり、又「奇病患者」といふ作の中にも同じ様な事が書いてある。泰三の「……が、困つ

た人だ」といふのは、こゝを指すものらしい。だが、僕の考では、非常な圓滿な天才、例へばゲエテ——彼の作を實は僕、殆ど讀んだ事がないので、よくは知らないが、人づてに聞いてゐる彼——の様な人物は別として、由來藝術家はどうもこの奇病患者の類である方がいいやうである。少なくとも、藝術家としては、健全家よりもこの奇病患者のものの方が面白いのは確からしい。その點で、藝術家として葛西善蔵はこの「奇病」に負ふ所が多い様に見受ける。こんな事をいふと、藝術と人生といふ様な難かしい問題になつて來て困るが、ザツクバランに言つて、これ迄の所、僕等は彼からこの奇病味を取つてしまつた藝術を想像し兼ねるし、さうすると甚だ興味のないものが出來上る。もつともこの奇病患者といふ事だけで、藝術家であるといふ譯には行かないのは勿論であるが、幸にも彼は、加能作次郎の言つた様に、自分はどんな人間であるか、現代の社會に於いて、どんな地位に置かれてゐるか、周圍の人々にどんな風に見られてゐるかといふ事を、はつきり掴まへてゐるし、それを「冷たい自己解剖の道具として自己を虐けてゐるやうな所がなく、また少しの皮肉

葛西善蔵

24 306
56 432
48 962

や自嘲や、冷笑なども」持つてゐない、それも確からしい。

實際、彼はこれまで食詰めては都會を去り、そこで居心地が悪くなると故郷を離れ、又「あわてて、酔拂つて、二三の友人から追ひ立てられるやうにして、故郷に向う汽車に乗るといつた様な事をくり返して來た。そんな中でも彼は、「が、もとより心急がれるやうな旅でもあるまい……」などと收まり返つてゐる。彼の藝術はそんな所から生れて來る様でもある。

「若し誰かが葛西善藏のやうな生活を眞似たら、それは鼻持のならないものとなるだらう。彼の生活は彼だから構はないのだ。彼だから許せるのだ。そしてそれ以上に更に、彼だからその生活からそれだけの貴い人間味を我々に味はせるのだ。彼は最も幸福な素質——此正直爺さんの素質を、生れながらに神から授けられて來た。」

斯う廣津和郎が言つてゐる。彼は更に

「彼は實生活に於いては、かなり徹底的なイゴイストである。いや、彼の藝術そのものも結局イゴイズムの藝術である……。」

これは實に卓見である。和郎は別なところでその説明をすると、附加へてゐるから、もう何處かでしたかも知れないが、これは是非聞きたいものである。で、その説明を彼に譲るとして、更に、

「彼は人生が如何に自分の思ふ通りにならないかと云ふ事について、始終歎き、悲しみ、憤つてゐるが、併し一方から考へれば、此物質に支配されてゐる世の中に於いて、彼ほど生一本に、我儘に、自分の思ふ通りな生活をつゞけて來たと云ふ事は、恐らくめつたに例のない事であると云つてもいい。」

と言つてゐるが、正にその通りで、善藏の藝術はその報告なのである。

僕が始めて葛西善藏の名を聞いたのも、廣津和郎からである。その頃僕は彼と半年ばかり同じ家に起臥してゐた、今から三四年も前の事である。善藏の話が出ると、和郎は三度に一度は屹度、詩でもうたふ様に、軽く節をつけて、

……忍路高島は俺の少年の夢だ。俺は少年の夢を抱いて忍路高島を放浪したのだ。俺の胸は火であつた。けれども俺は凍え死なうとした……

といふ文句をくり返してゐた。別に名文句とも思へないが、その言葉の調子に僕はいつも引かれた。恐らく和郎自身もそれを名文句としてではなく、やはりその調子を愛誦したものに相違ない。その後、彼はあの「悪魔」の載つてゐる雑誌「奇蹟」を僕に渡して、是非読んで見よとすすめた。僕は早速それに應じて見ると、先の文句はその中の一節である事を發見した。「悪魔」は決して完全な小説ではない。又同じ作者の數種の小説の如く、所謂秋聲張りのものでもない。そしてそれは寧ろ小説ではなくて、散文で書かれた詩である、けれども、僕の僅な讀書範圍ではあるが、この散文詩「悪魔」の如く不思議な魅力を持つてゐる作品に出遭つた事は、これ迄に五指のうち数へる程珍しいものだと思つて憚らない。「理解ある讀者は、彼の作を通じて流るるリズムを聴くであらう。すべてのものの流れに諧調が見出される時、そこにリズムが湧き出る。藝術に於ては、感激や思想の流れの

諧調がリズムとなる。行進的、連続的はいふ迄もなく、爆發的であらうとも、断續的であらうとも、又それが逆行的であらうとも、感情や思想の流れに諧調が形づくられる時そこにリズムを聴く。いかなる種類の藝術でも、それが表面にしる裏面にしるリズムを見出せないものはほんとの藝術ではない。藝術に見られるリズムは、その産出者の生命の流れのあらはれである。私は第一に彼の作にリズムを聴くことによつて、藝術的素質を持つ彼を認める。」

「しかし、彼の作から湧き出るリズムは單純なリズムでない。奇怪なリズムである。私達の知る作家に見出されない異様なリズムである。それは私達が彼の最もすぐれた作と思ふ「悪魔」に最も調子高く鳴りひびいてゐる。私の説の眞偽をたしかめたい讀者は「悪魔」一篇を注意深く再讀して見給へ。」

以上は先に話した舟木重雄の「原始哲人の面影」の中から引照したのである。これを見れば、僕などが千言萬言を費しても言ひ盡せない事がちやんと言はれてゐるから、こゝに少

し長く引用した次第である。

「彼の世界は、天でもない、地でもない、天といひ、地といふにはあまり渾沌としてゐる。天地分れざる前のト・アパイロンの世界が彼の世界でなければならぬ。」

斯う重雄のその文章の始に書かれてある。僕、無學にして「ト・アパイロン」といふ言葉のはつきりした意味を知らないが、知らないながらに、大抵當りをつけてゐる。

今年の冬の或日のことであつた。僕、葛西善藏とその他の人々と共に、連れられて場末のとある小さな洋食屋の二階で、酒を飲んだ事があつた。さて、一同相當に酔が廻つた頃、何かの話のついでに、同席の相馬泰三に依つて、善藏の踊が非常に面白いものである事が紹介された。そこでみんなが頻りに、葛西踊れ、善藏踊れとはやし立てると、見るうちに彼はしづかによろめきながら立ち上つた。彼は裏地を引剝いだ、極めて舊式なインパネスを着たまゝで、そのインパネスは昔のによくあつた様に頭巾が付いてゐた。さて蹠跚たる足を上げて踊り始めた。その手ぶり、足つき、からだのひねり方は、よく酔つばらひのや

る様に、亂暴な活潑なものではなく、極めて悠々として迫らざるものであつた。泰三が説明して言ふには、飄々として千里の野を行く趣きがあるさうである。誠に恰好な形容である。僕も同感した。大袈裟に言ふと、僕は生れて斯くの如く珍妙にして、且趣深い踊を見た事がない。一座の人々が手を打つて笑ひ興じてゐた間に、その時最も酒を飲まなかつたので、最も酔つ拂つてゐなかつた僕は、善藏のその踊がほんの一さしか二さしかで止められたにも拘らず、眞面目に感嘆これを久うして、今だにその恰好を忘れる事が出来ない。

此頃、相馬泰三と會つた時、又善藏のその踊の話が出たが、彼の言ふ所に依ると、善藏の踊る踊たるや、僅か二三種を出でないものださうで、然し其は皆僕等の見た事も聞いた事もない、彼の郷國のもの及び彼自身の創作に係る所のものださうである。尙泰三の話に依ると、僕が一見に及んだところのものは、「お山下り」なるもの、一節ださうである。さういへば、成る程、原始の人が雲を分けて草を踏み、霧を泳いで谷を行くと言つた趣の髣髴たるものがあつた事を、僕は今も目に見る様に思出す事が出来る。思ふに、舟木重雄の

「ト・アパイロン」といふのはあんな感じの事を言ふのだらう、と僕は窃に解釋してゐる。

その時、やつぱり泰三の話として、葛西善藏は酒などを飲むのにも、決して嗜れがまし
い家に行かないさうで、若し間違つてさういふ席に出ると、突然腹が痛くなつたから歸ら
うなど、言ひ出す、實は腹が痛いといふのは口實で、さういふ家にはすぐ居堪らなくなる
のださうである。だから、彼は銀座界限などに出て行く事は一年に一度か、せい／＼二度
位のもので、それを漸く納得させて、二人が銀座に散歩した或時のこと善藏泰三に言ふ所
に依ると、前者にはその銀座の町を歩いてゐる青年、買物をしてゐる女、電車に乗つてゐ
る人、すべてが皆俳優の様に見えるといふのである。君、意識なしに、あんな歩き方、あ
んな物の言ひ方、あんな驀口の出し方、あんな電車の乗り方はしない、斯う善藏泰三に感
嘆して言つたさうである。

言ふ迄もなく、銀座を歩く人々で、誰一人、人にその仕草を見せる俳優のつもりで、意
識して行動してゐる人などはない筈である。だが、「悪魔」の結末にもある様に、山の小屋
に入つて、「俺の郷里をそつくりこのまゝ、そつちへ持つて行きたい、氣の變になる奴がど
んなに澤山出来るか見てやりたい。此間一度雪が降つた。がまだ、山も地べたも裸かで寒
がつてゐる。俺の山の葡萄は、支え木にしがみついて、赤い枯葉をKのやうにブル／＼震
はしてゐる。雪よ降れ／＼、今に五尺も六尺も積るだらう。芝居の紙の雪ではないんだ、
本物なんだ。雪は俺達の遠い昔からの親友なんだ。山も地べたも、林檎も、葡萄も犬コロ
も俺達もそればかり待つてゐる。俺達は早く早く、一日も早くあの底に埋まりたい。永
久に春がかへらなくも好い。かへつて來ても好い。がなんにしても一日も早く、ちつと埋
まつて息を殺して居られる自分になりたい。俺のからだは疲れたばかりぢや。だん／＼元
氣になつて來て居る。……」といふ様な手紙を書く良吉の善藏である。さう見えるのだら
う。

ふと僕が思出すのは、冬になると、子供等がよく歌ふ「ぢ／＼ば／＼火の子、子供は風の子」
といふ歌である。僕などは「藏の中」などに入つて收まつてゐる「火の子」組だが、彼は正し

く、手のかじかむのを頓着しないで、雪空を見上げながら、歌つてゐる「風の子」に違ひない。

それで思出したが、いつだつたか谷崎精二が冗談に「彼には都會人の悩みなどといふものは少しも解らない。彼に分るのは貧乏と、病氣の喘息の苦だけである」と言つた事がある。誤解のない様に言ひ添えておくが、精二は決して彼をけなして斯う言つたのではなく、それどころか餘り人の作の價値を認めない癖の彼としては、善藏などは五本の指のうちにに入れて認めてゐる一人である。その時もそれは善藏を賞めた後で、彼一流の冗談を以て、口直しの様に言つた言葉なのであるが、僕の見るところでは、この言葉亦一面の眞理であると思ふ。

さういふ風な人間であるから、彼がその散文詩「悪魔」の中で、

……何かしらいらくくと脅迫されてゐるのである。つつかれてゐるのである。何者が俺を虐けてゐるんだらう……？ あの煉瓦の建物かな？ アスファルトの道路かな？ 電

車かな？ 自働車かな？ 着飾つた生甲斐のありさうな顔をした人間どもかな？ 抑も全體生活と云ふものかな？ が何にしても俺は虐けられて居るに違ひない。俺はあの建物や道路を見ると、慟哭したくなる。お、大地なる母よ！……俺は地べたに顔をうつめて慟哭したくなる。俺はただく母がなつかしい。それがまた悲しい……

彼は遠いく、むかしに、自分と母なる大地とだけが存在して睦み合つてゐた有様を、夢のやうになつかしく想像することが出来る。その時分には彼こそ一切の王様であり、唯一人の寵兒であり、勇氣と慈悲の權化であつた――

と言つてゐる、無理のないことである。だから、彼の小説の中には「怖い」といふ言葉がよく使つてゐる。都會にゐると、彼の様な人は色々なものが怖いに違ひない。卑近な話だが、彼は電話を掛けるのさへ怖がつてゐる。その癖、一方に又中々呑氣なところがあつて、

……(何處からか、救ひのお使者がありさうなものだ。自分は大した贅澤な生活を望んでゐるのではない、大した慾望を抱いて居るのではない。月に三十五圓もあれば自分等

家族五人が饑えずに暮して行けるのである。たつたこれだけの金を器用に儲けられないといふ自分の低能も度し難いものだが、併したつたこれだけの金だから何處からかひとりに出て來てもよささうな氣がする)……

などと、蟲の好い事を考へてゐる。

ここ迄書き進んで、少し疲れたので、一寸散歩して見る氣になつて外に出たところが、とある古木屋の店頭で四月號の「早稻田文學」を手にして、谷崎精二の「子をつれて」の批評を一見する機會を得た。僕、先に善藏が詩人である事を、自分が一人で言つた様な氣になつて、窃に得意にしてゐたところが、精二既にその文中で、「善藏君を徹底リアリストだと言ふのは眞に善藏君の藝術を理解する者の言ではない。藝術家としての善藏君の素質の中にはかなりロマンテイケルの要素が含まれて居る筈だ」と喝破してゐるのを發見して、些か悄氣た氣味である。そして彼は「子をつれて」の中の

……「人間は好い感興に活きる事が出來ないとすれば、悪い感興にでも活きなければならぬ。さうにでもしなければ此の人生と云ふ處は實に堪へ難い處だ。」……

と言ふ文句を引いてゐる。少してれ氣味だが、無論僕も同感である。

ただ、精二が「善藏君にあつては十年前の『悪魔』や『哀しき父』も、最近に發表された、『泥沼』や『遁走』などと云ふ作品も、其味はひに於て作の方向に於て、作者の人生に對する見方に於て、餘り著しい變遷は認められない様に思ふ」と言つてゐる。これにも僕、實は殆ど同感ではあるが、先の腹癒せをする譯ではないが、一寸「さうぢやないよ」と言ひたいのである、といふのは、その文の終の方で精二が、彼は彼獨特の感興の爲にどうかすると氣持に或るこりを造へる、彼の此のこりが取れる時、彼の作風はもつと客觀的にもつと雜色になるであらうと言つてゐる事である。そこを掴まへて、僕、彼はその最初の作に比して、最近の作に於いては幾分精二の所謂客觀的になり、やがて雜色にならうとしつつある事を認めると言ひたいのである。これは舟木重雄が「『悪魔』當時にあらはれた高鳴りするリズムが、近年の作に調子をひくめた」と言つてゐる、それなのである。精二はこりが善

藏の人生に對する忠實な觀察を妨げ、現實の諸相から冷靜な彼の凝視を容易に擦過せしめて、妙に抽象的な空想へと導く、茲に善藏のリアリズムの破綻が生ずると言つてゐる。正に江口渙等の所謂徹底リアリズムどころの騒ではないといふ事になる。僕はこの精二と渙との違つた見方には、無論精二の方に組するものである。が、僕はそれに尙附加へて、善藏が近作には、そのこりを取らうと努力してゐる跡が見えると言ひたいのだ。さうするとつまり善藏が段々徹底リアリズムにならうとしてゐる事になる譯である。ところで、元來彼の作の面白味の重要な原因として、このこりといふ奴が大變力をかしてゐるといふ事も僕は見受けるものである。それかあらぬか、重雄はその「原始哲人の面影」の中で、善藏に力の出し吝みをするなど言つて、大いに彼の最近の作に戒める所があるやうだし、精二亦、「さうした客觀的作家になつて貰ふ事を強ひて要求しない」と、暗に不満の意を洩してゐる。が、僕としてはそのいづれにも片付け兼ねる。

僕、常々思ふのに、藝術品といふものは、そのものだけでちやんと出来上つてゐるもの

が上乘であつて、缺點だらけだが、その作家が未來によくなる事を示してゐるなどいふ類のものはこれを取らない。その意味では、「青い顔」や、「泥沼」や、作者自身大いに自信を持つてゐる「遁走」やを、僕はとらない事にしないと、話の筋が通らぬ事になるのだが、ここでは便宜上出来榮を別にして、最近の作を以て、彼が墮落したものだとも、僕は言ひ切れないのである。兎に角僕には、葛西善藏が世に認められた當時、批評家等がやつて彼を迎へた言葉のリアリストといふものには、彼、これからほつ／＼それに進んで行くのであるまいかと思はれるのである。その方が彼をして、よりよい藝術家にさせるものか、否かはそれは今のところ神様でなければ分らないとしておく外はない。

近頃、或ひは以前からかも知れないが、善藏は屢々漱石の所謂「則天去私」といふ事を口にする。

話は違ふが、僕嘗て、彼とある一品料理屋で飲んだ時、彼に大いに驚かされた事がある。それは彼が異常な妻子思ひで、學問した人には珍しく口先で言ふのではなくて、恰も

田舎の老人がその妻子を心から思つてゐるやうに、彼、思つてゐる事である。彼は一たび妻子の話を始めると、いつ迄も飽きないかとさへ思はれる程である。彼は妻子と共に田舎に引込んで、土を耕す事を本當に、虚偽ではなく、理想とするものらしい。それに反して、文學者でありながら、朝から晩まで文學を談じたり、或ひは金に追はれ追はれして、原稿を書くといふ様な生活する事を考へると、ひどく堪らなく憂鬱になると言つてゐる。

そこで、だ。……もう少し言ひたいのだが、もうとつとくに與へられた紙數が切れてしまつたので、止めなければならぬ。兎に角、今や彼は先にも言つた様に「則天去私」を稱へて、これも以前からかも知れないが、

徐行踏斷流水聲

縱觀寫出飛禽跡

など、いふ句を愛誦してゐる。彼自身も常にさういつてゐるが、そこで、やがて雲水行脚と出かければ、何の何のドストイェフスキイでもなければ、アンドレエフでもない、彼は純粹の市洋詩人なのである。

(八・二)

近松秋江論

—

先達て、或雨の降つた晩のこと、友人のS——と二人で神樂坂の落語の寄席に出かけたことがあつた。既に夏場に入つてゐるので、客足のうすい上に、殊に蒸暑い晩のことでもあり、それに雷鳴さへ催してゐたので、客は數へる程しか來てゐなかつた。見たところ彼等は、それ〴〵階級や職業は違ふのだらうが、兎に角我々同様のよく〴〵退屈な人間に違ひなかつた。落語家の言葉ではないが、しかし斯ういふ人間こそ彼等から言ふと客の中の客で、それと同時に皆一通りの寄席通などといふ連中なのであらう。早い話が、僕たちの坐つたすぐ傍に陣取つてゐた二人連の藝者だ、彼等は「電話が掛つて來たら呼びに來て頂戴な、」などと婢めかけやに言ひ残して、お上の留守の間にそつと拔出して來た者たちで、今夜あ

たりは稼業もさう忙しくないだらう位にたかをくいつて、又實にこんな心掛の女たちに限つて抱主の持てあましてゐる賣れない連中で、その癖割合に頭がよくて、お茶ツぴいのお茶ツぴいで、されば、客席などは一廉の通で、お喋りと間食とを事とする、どうせお座敷などと言つても十二時過を殆ど専門とする連中に違ひないのだ。

丁度僕たちが入つて行つた時、さういふ一筋縄で行かない少數の客を相手に、高座で喋つてゐた男といふのは、何といふ名か知らないが、どうせ無名の、今年になつて漸く落語家の末席に列し始めた位の男に違ひなかつたが、大阪辯で、その時は眞打が小南だつたら、多分彼の弟子だらう、下手な話をつゞけてゐた。その場の様子で、僕は察したのだが、彼はもう大分の時間さうして話しつゞけてゐるらしかつた。が、それには、どうせ時間つぶしの客たちは、殆ど耳もかさずに、めい／＼勝手に煙草をすつたり、小聲で話し合つたりしてゐた。高座の男にも無論それは分つてゐるらしい、けれども、彼は誰も輕蔑して聞いてゐないとは知りながら、これも職業だ、これが修業だと觀念して、やつてゐるのに違ひなかつた。

それから尙十五分以上もその藝人は、後につゞく者が來ないと見えて、覺えた話のありつたけを、何でも、その時は一人の男が二人の女房——つまり本妻と妾とを二階と階下とに住ましておいて、その兩方の嫉妬の角に挟まれて困りながら、加藤左衛門なら高野の山に遁れるところだが、遁れもせずに、毎日梯子段を上りつ下りつして難儀してゐるといふやうな話をつゞけてゐたが、突然、又雷が鬼怒川の何とかにでも落ちたのだらう、急に電燈が消えたのだ。けれども、無論、高座の藝人は暗がりの中で、膝頭で高座の床を叩いたりして、その話中の男が梯子段を上る音を摸ねたりなぞしながら、話をつゞけてゐる。賢明な——無論、雷雨の晩に客席に來るやうな人たちは、晴天の日に夫婦や家族同伴で來るやうな人たちから思ふと、ずつと賢明に違ひない、——客たちは、それでも別に大きな聲を立てはしなかつたが、さうだからと言つて、その藝人の話に聞入つてゐたのでは無論ない。

さて元もと寄席の天井は普通の家よりは大分高いから、豫備の瓦斯をとすのに中々容易でないと思えて、法被を着た男たちがあちこちと奔走した末、それに亦十分ほどもかゝつて、やつと瓦斯がついたかと思ふと、今度は二三分したらうまく故障が直つたと見えてばつと電燈がついたのだ。それだけのことは、口で言へば何でもないやうだが、藝人にとつては、まるで手をかへ品をかへて話の邪魔をされてゐるやうなものである。彼の顔つきは次第に變に、神経的になつて行つた。それに、まだ駈出しの彼には、乏しい話の種が盡きかかつて來た様子だつた。それにも拘らず、まだ後詰の者が來さうにない、運悪く、それに乗つて後詰の者が通つて來る筈の電車が、先の停電で止まつたらしいのだ。

彼は高座で無暗に湯を飲みながら、益々神経的に顔を歪めて、時々救を求めらるやうに眞赤に充血した目をして、樂屋の方を窺うてゐる。僕はもう彼の様子が見てゐられなくなつて來た。その時、彼は突然決心したやうに、

「ドーンと一つ、三味線に景氣をつけて貰うて、嗚鳴りませうか？」斯う叫んで歌ひ始め

た。その歌が、今迄下手な話を持ちあぐみながらも歌はなかつた理由が分つた、お話にならない程まづいのである。従つて、歌の数なども我々素人よりも知らないらしいのだ。せいぐ牛込か神田邊の下宿にごろくしてゐる、不良書生位の歌の知識を以て、さて彼が歌ひ出したのは、都々逸を十ばかりそれも盡きて、さのさを五ツばかり、ゑんかいな節を三ツばかり、それから「東雲しのめのストライキ」を二度くり返して、やつとするりよう節を三ツやつた時に、後詰の藝人が樂屋にくり込んだらしかつた。

「何とか何とか、やつとせ。ア、するりようく。」

やつとせ、推量々々、推量々々、と彼としては「やつとせ」と「推量」とにせい一ぱいの意味を含めて、額にしつとりと膏汗をかいて、絞り出すやうに斯う嗚鳴りながら、お辭儀をして、樂屋に歸つて行くその顔つき、姿、腰つき！（人生藝人たることの、あゝ何といふ辛さだ！）それを見た時、僕のみならず、そこらにゐた例の一筋繩で行かぬ客たちも、皆無言で、ほかんと口を開いて、茫然とした形で彼を見詰め且見送つた。

彼の姿が樂屋に消えた時、僕はほつと息をついた、僕自身も助けられたやうな氣がしたのであつた。

「どうだ？……」そこで稍々あつて僕がS——に言ふと、彼は、彼も亦感無量であつたのだらう、無言のまゝで僕の掌を開いて、指でそこに「シラカバ」と書いた。

「何だい、シラカバが？」と僕が聞くと、

「彼等はあの苦勞を知らないからね……？」とS——は眞面目なやうな、お道化たやうな調子で言つた。

「まつたくだね、」としかし僕は眞から底から同感した。

引合に出した白樺出の諸君には氣の毒だが、無論、僕なぞがこんなことを言つたからとて、自信深い諸君はすき好んで、何も明日からそんな卑しい浮き苦勞をしなくてもいいし又しよう筈もあるまい、諸君は諸君で、立派に行く道があるのを、僕とて認めない者ではない。たゞ斷つておきたいのは、文章の修辭上、この一文に於いては對稱法に依つて、心

ならずも諸君及び諸君の藝術を無理に少々こき下すかも知れない、それは又他日埋め合せをするとしてこゝでは大目に見免して貰ひたい。

さて、それに就いていつか有島武郎が、何もわざわざ苦勞をしたり經驗をしたりしなかつたことを自分は悔いしない、或時カントの許に、アルプス探險家が一個の鑽石を持つてやつて来て、それをカントに見せたところが、彼はそれをつくつく眺めた後、その石の成分は言ふ迄もなく、そのあつた場所から、その附近の光景までを目に見るやうに説明して、實際の探險者を驚かしたといふ話がある、自分たちは取りも直さずそのカントの流儀だといふやうな意味のことを、何かの雑誌に書いてゐた。誠にもつともな言葉である。はア、斯ういふ人は斯ういふ風に考へて、斯ういふ風に言ふものか、と僕は實は非常に感心した。恐らく僕にしても、有島武郎だつたら、さういふに違ひない。

ところが、こゝでは、武郎ならぬ僕が、先の對稱法で言ひたいのは、苦勞の經驗のない人や、さういふ人の小説よりも、その反對の人や、さういふ人の小説の方が、どうも一段

面白いといふことである。常識的だといつて嗤ふ人は嗤へ、僕にはやつぱり身その境にあつて、色々と酸いも甘いも嘗めた人や、さういふ人の小説の方が、何といつても學問や空想でやつてゐるそれ等よりは、どうも沁々した味があると言ひたいのである。

藝は磨くに越したことはない。無論、それは手先や口先を磨くことではない、殊に文學は中學生の作文や、政談演説と事變り、その藝を磨くといふことは筆を練ることではなくて、自分自身を練ることである。具體的に言ふと、根さへ盡きねば、金はあるのだから、決して潰れることのない同人雜誌に、何を書いても、何をして、別に誰に遠慮はいらない、卑しいことを言ふやうだが、生ある限り鼻の下のお祭に事缺く憂は少しもないといふやうな境遇では、やつぱし餘りいゝ磨きが掛らない、と僕は思ふのである。みながみな、どの作もみな、さうだと言ふのではないが、一部の白樺諸君の小説は、僕には、どうも、今言つたやうな状態の下で、さしづめ人間の色々な苦勞を材料にすることが出来ないから、書物や空想の方から考へ出しよ、人道主義などといふ主張を材料にした、即ち小説本來

の目的から言ふと、第二義的なものが多いやうに思へて仕方がないのである。(無論、これも大分先に言つた對稱法で言ふ言葉だから、諸君ゆめくむきになつて怒るべからず。)

そこで、賢明なる諸君は、この結論として僕が何を言はうとするか、大凡察しられたらう。即ち先の寄席の落語家の苦勞に沁々同情した僕は、ひいて思を文壇にやる時、僕の頭に誰よりも先に、君は實に苦勞をしたなア、と肩の一つも叩いて、慰めの言葉を以て報いたい人として、近松秋江を思ふのだ。

(こんな風に考へて來れば、諸君、近松秋江が近頃時々、若い所謂苦勞の足りない作家なぞに對して、躍氣になつて食つてかゝるやうな文章を書いて、ひとりで醜い程いらくしで見えることがあるのも、見ツともないと一概には叱れない、同情に値するではないか?)

二

近松秋江!

その後はしばらく。御近況は如何?——坊間傳ふる所に依れば、君は今京都で、「葛城太

夫」と世帯を持つて、味な日を送つてゐるとも言ふし、或ひは又例に依つて尾羽うち枯らして、君のその見得坊がほろ／＼の着物を着て、持つ筆を運ばず氣力はおろか、それだけの肉體の力さへ衰へて、眞に骨と皮になつてゐるとも言ふ、如何？

(餘り面識もない、先輩の君に向つて、殊に餘りな苦勞をし過ぎた番頭が、生意氣な小僧を憎むやうに、人の物の言ひ方などをひどく氣にする君は、こんな禮のない口のきゝ方を僕等がすると、或ひは腹を立てるかも知れないが、言ふ迄もなくこれは對話ではなく、一種の文章と見て許し給へ。)

もう六七年も前のことであつた、君が始めて、無論文字通り始めて大阪の地を踏んだわけではないだらうが、つまり現在のやうに京大阪に足を止めるやうになつたその始めて、大阪に來た時、僕は君の案内者として、その後君が「仇なさけ」「流れ」「津の國や」なぞいふ諸作の材料となつたところの、大阪の難波新地を案内したことがある。君、覚えてゐるか？ 無論貧乏の僕のことであるし、それにあの邊一帶は僕の故郷なので、今ならいざ知らず、

當時今より更に若年であつた僕は、君を行燈の掛つた家の中まで案内することが出來ないで、唯それ等の家々の並んでゐる町を、素通りに連れて歩いたゞけであつた。それでも君は歩きながら、徹頭徹尾「これはいい、これは氣に入つた！」と君一流の眞に迫つた物の言ひ方で、讚美の聲を放つてゐた。

その同じ晩だつたか、その翌日だつたか、君が僕に、大阪で一人では寂しいからといふので、僕は當時「大阪毎日」にゐた故の増野三郎を君に紹介したことがあつた。そこで、君等が始めて會つたのは難波新地の、とある小さなカフェーであつた。ところで君と彼と一言二言初對面の挨拶の言葉を交してから、やがて雑談に入つて行つた光景は實に不思議なものであつた。

何でも君が大阪を讚美し出したのに對して、増野三郎は、彼はその頃から既に波斯のオマル・カイアムとか、印度のタゴオルなどの崇拜者だつたので、大阪情調などは彼の眼中になくて、彼はまだ見ぬ波斯印度を憧憬する話を始めた。そこで君等が眞面目に相手の話

を聞いてゐたものとする、屹度争になつたのだらうが、よくしたもので、君は他人の話が君に興味のない時には、いくら目の前で喋られても耳を傾けないで、自分は自分の話をつゞけるといふ風だし、三郎が又それと同じ風だつたので、その時君等は向ひ合つて對話をしてゐる恰好をしながら、互に壁に向つて話の練習をしてゐるやうに見えるのだ。

君の話がある切目に來て、そこで君がもし一分でも息を切ると、

「ところで波斯では……」と言つたやうに三郎の話が始まる。その彼の話がどこかで一寸でも切れると、すかさず君は、

「それやさうだがね、あの難波新地の……」といつた風に、相手に切られた君の先の話の續きをつゞける。すると又、その切目に、

「だからオオマル・カイアムは……」と彼が、君のために一時遮られた、先からの彼の話のつゞきをするといつた風だ。

そのカフェーは小さい家だつたので、各々の卓子の間に、やつと二脚の椅子が並ぶ位だ

つた。同じ時に、君は覚えてゐるまいが、君等とは別の僕のある大阪者の友人が隣の卓子にゐて、丁度僕は君等が會話を始めたのを機會に、その友人の卓子に來て二人で珈琲か何か飲んでゐたのだ。ところが、君と三郎との會話がそんな風なので、僕も驚いたが、大阪者の友人は更に驚いた様子で、目を見張つて小聲で僕に、

「君、東京の人はみんなあんな物の言ひやうをするのんか、あれで分るのんかいな？」と聞いた位だつた。

やがて、そのカフェーを出て、君、彼、僕と三人で、戎橋の北詰の君の泊つてゐた旅館に出かけた。

丁度その時分、長田幹彦が賣り出して、京都に來てゐた。三郎は幹彦と學校で同級だつたと言ふので、時々大阪から京都の幹彦を訪ねて行つたものらしい。で、彼は従つて幹彦の小説を非常に賞めてゐた。君も賞めてゐたやうだつた。僕も、「落落」「寂しき日」「母の手」の三つの作に依つて、大いに感心させられてゐた。ところが、それは、丁度「尼僧」と

いふ彼の作が「中央公論」に出て間もなくの頃で、僕はこの作を読んでその作者に可成り失望を感じてゐた時なので、「しかし、」と言つて、その事を一座で訴へると、三郎は言下に、「いや、さうぢやないよ、僕はやつぱりいゝ作だと思ふ、」と斷言した。そこで二言三言彼と僕との間に問答が始まつた。すると、それを傍で聞いてゐた君は、

「よし／＼、」と僕等を制して、「僕はまだそれを讀んでゐないんだ。僕が讀んで見たら分る。まあ、待ち給へ、」と如何にも自信あるをぢさんらしい調子で僕等を制した。

元より僕は性來さういふ議論は嫌ひな方で、早く切り上げたく思つてゐたところなので、殊にこの君の言葉に大いに安堵して、君に後日の判断を乞ふことにした。といふのは、君一流の論法の臭みはあるが、君は當今稀に見る小説(敢て文藝と言はぬが)の鑑賞眼のすぐれた人であることを、僕はその頃から十分信をおいてゐたからである。終に、その後「尼僧」に就いての君の判断を聞く機会を得ないが、今でも無論、小説鑑賞家としての君を、信用してゐることに少しも變りはない。

話が傍に反れたが、先のことがあつてから一二年後の或日のことである。やつぱし僕が大阪に行つた時のことだが、或夕方、その夜の汽車で僕は東京に歸るつもりで、しかし少し時間があつたので、心齋橋筋を一人で散歩したことがあつた。そして或呉服屋の店飾をのぞいてゐると、ふと正面の鏡に、(その店飾の奥正面に一面に鏡が張つてあつたのだ)知つた人の顔が僕の顔と並んでゐるのを發見した。すると、僕のと並んでゐた顔の方でも、その瞬間僕のを認めてそこで、

「やあ!」と鏡に向つて言つて、それから實際に、それまでは知らずに肩を並べて並んでゐて、鏡の紹介で互の存在を知り合つた二人は、横向いて挨拶を交した。君、覚えてゐるか! それが君だつたのだ。

そこで、僕が、今夜の汽車で東京に歸るといふと、君は一汽車ぐらゐ遅れてもいゝだらう、とか何とか言つて、兎に角僕の宿まで来てくれ、是非話したいことがある、一寸、一寸、一寸でいゝから来てくれと言つて、そしてもう先に立つて歩き出した。途々君はその

後はどうしたとか、暫くだつたねえとか、さういふ挨拶の言葉などは一言もいはないで、いきなり當時君の馴染んでゐた女に就いて話し出した。君はその女の裸の美しさ、殊に彼女の黒髪に就いて、(黒髪といへば、君はその後黒髪といふ題の小説まで書いたね、)口から泡を飛ばしながらざつと一時間ばかり話しつゝけた。ところで、遺憾ながら、その時聞いた君の女に就いての話が僕に與へた印象は、殆ど具體的なことは何にもなくて身振り手振り入りで、一人の男、即ち君が一人の女にぞつ、こん惚れたことを、「その女が君、その女が君、君、君、」と、丁度興奮した吃音者が物がうまく言へないやうに、如何に惚れたか、如何にその惚れた女の裸が美しいか、その女が恠げな性質か、その女の髪が魅力があるかといふことを、思ひ餘つて言へないのを、言はう言はうと骨を折つてゐる姿だけであつた。そして一通り、それでも話し終るのを待つて、僕が別れようとした時、始めて君は、ぢやあ、これから直なら次の汽車に間に合ふから行き給へ、と斯うだ。

今にして思へば、それは「別れた妻に送る手紙」以下數篇を、君の生活及び藝術の第一期

とすれば、次の第二期を劃する君の生活及び藝術の女主人公なる大阪の、その後君をだまして捨てた、遊女に就いてゝあつた。その時君は屹度その女に就いて何か言ひ度くて言ひ度くて堪らなかつたのを、丁度僕を見付けて、一先づ腹の蟲休めに話したのに違ひない。けれども、悲しさにしても、嬉しさにしても(殊に戀の嬉しさなぞといふものは)普通の人は、誰だつて多少とも人に吹聴したい氣はあつても、あんなに相手かまはず、我人を忘れて、夢中で言へるものではない。それだけでも、君は十分珍しい男だ。思ふに、その夢中になつての言ひたさ、訴へたさの状態にある時、君は最も生甲斐ある時に違ひない。

つまり、君の生存の理想も、藝術の理想も、その感興の世界に生活し、その感興を現すものに外ならない、といへば盡きるかと思ふ、近松秋江、如何?

ところで、ありやうに言ふと、君の所謂輕薄にして、物の分らない世間一般の讀者は、今日君が數十年の苦勞の藝術を、その價值だけに迎へてゐない。こゝに僕が君に就いて些か管見を述べようと思ふ所以である。若くして君は苦勞し、中年にして君は難儀し、返り

はよく世の中の公平と不公平とを言つて嘆くが、これはあきらめねばならぬ。僕が君にこんなことを言ふのは、釋迦に説法をするやうなものだか、僕平生、今の世は官吏や軍人は言ふに及ばず、藝を賣つて萬人に訴へる役者、藝者の輩でさへも、決してその技倆を以て等級がつけられるものではない、それから思ふと、勝つた負けたで等級のつく角力取ほど公平なものはない、と思つてゐた。ところが、その角力士でさへ、人氣から油が乗つて力が出たり、かと思ふと、稽古が強くてもいつも本當の成績がよくなかつたり、さう完全に公平には行かぬものらしい。力があるのに、人氣や、元氣で負けるなぞといふ程、變てこなものは、當人の身になつて見給へ、情ないことはないに違ひない。

近松秋江！

その後は如何？

「うすすみに、かく玉章のおもひして、かり鳴きわたる宵暗の、月かけならでぬしさんに、こがれて愚痴なたゝみ算、思ひ廻せばまゝならぬ、はやく苦界をそろかしく。」

三

音に聞くエス・キリストといふ人は、全人間の罪と苦勞とを一身に引受けて十字架にかゝつて死んだと言はれてゐる。なる程、古來の西洋の畫家たちが、各々の筆法を用ひて描いてゐるキリストの顔を見ると、皆そのやうに畫いてゐる。そこで僕がエス・キリストの顔とわが近松秋江の顔を比較すると、キリストも秋江も、亦この文章を讀む諸君も、等しく苦笑するかも知れないが、試みに後者の顔をよく見て見給へ、全人間といふと少し大袈裟になるが、少なくとも五人前や十人前の人間の苦勞を、一人で背負はされて惱んでゐるやうな顔をしてゐる。但、この「苦勞」は前者のと違つて、少し範圍が限られてゐる。これは「女とは何といふ人を魅する生物だらう」といつて身を悶える、すべての人間の愛慾の苦勞である。阿房なことを言ふやうだが、つまりキリストが全人間の神様なら、秋江は少し範圍が狭くなつて、藝者、淫賣、遊女の神様ぐらゐにはなれよう。

彼の作を好まない讀者も、彼の性行を批難する友達も、僕が今更くどくと彼の目付が

どうの、口元がどうのと詳しい人相を解剖しなくても、又彼の何といふ作はどうだとか、彼といふ作が斯うだとか、と批評して聞かせる迄もなく、超人や不具者ならばいざ知らず我々世間並の同じ人間なら、——譬へて言つた方が早いだらう、つまり島崎藤村であらうが、武者小路實篤であらうが、西園寺公望であらうが、誰でもがそれ／＼幾らかづ／＼持つてゐる悩みを、彼は特別に五人分か十人分くらゐ父なる神様から持たされて、五人前十人の苦勞をしてゐるといふことだけは、肯定しなければなるまい。キリストならざる秋江はそのために嘗めた身も世もあらぬ程の苦しみを、唯詳細に洩らすだけで、それについての救の道は説かないが、(何故といつて、彼は藝術家なのだから、)と言つて、久米正雄の「ほたる草」が星董戀愛の聖書なら、彼の數多の小説は取りも直さず人間愛慾の聖書的小説だと廣告してもよからう。

彼は彼の或作の中で、小説の中に議論を挟むことは、非常に好むところではないが、一ツは自分がまだ渾成した創作で讀者を十分感心させるだけの腕がないからと謙遜し、尙一

ツは多少さうしてゐても、さういふ情緒と理解とを持つてゐない讀者に解らないのが残念だからと憤慨して、例を尾崎紅葉の「金色夜叉」と「多情多恨」にとり、それ等の作を推賞しひいて彼自身の藝術を辯護してゐたことがあつた。曰く、それ等の作は戀と愛とのいきさつを以て人間世界の姿として描かれてゐる、その點に於いて日本のどの作家が紅葉と比敵し得るであらう？ 紅葉は決して單なる通俗作家ではない、と。さうして彼は「モンナ・ブナ」や「アンナ・カレニナ」や「マダム・ボヴリイ」をもついでに、彼らしい言ひ方で推賞してゐる。彼のさういふのは誠にもつともである。

僕は彼がその眞價だけを今日一般の讀書界から認められてゐたならば、彼のそれ等の言葉を恐らく我田引水の無用言として、わざ／＼改めてこんな所で紹介しなかつたであらう、だが、さうではないのだから、こゝでは彼を賞めよう。さうだ、彼も亦天晴れ書いたものである。愛人に背かれた貫一の悲憤、愛妻に死なれて、愚痴恨みに日を送つてゐる柳之助の煩悶にも増して、それよりも更に一層深く、彼は數多の彼の「別れた妻に送る手紙」を書

いた。

彼は、讀者の多いといふことが通俗作家といふ證據にならない、と紅葉のために辯じてゐるが、さうかも知れないが、彼の作が紅葉よりも讀者の少ない理由として、僕思ふに、彼の作が往々小説の域を越えさうになる程、主觀的に過ぎるといふ嫌ひがあるのも確にその一には違ひないが、今一つの重大なる原因は、やはり紅葉のそれよりも彼のそれの方が狭く且深く行つたゞけ、つまり非通俗的だからではあるまいか？ 更に僕思ふのに、彼の作はその非通俗で成功し、通俗的なものに於いて失敗してゐる傾がありはしないか？ 同じ流と言はれた、當年の赤木桁平の所謂遊蕩文學者等の中にあつて、外の人々が皆桁平の棒で打たれた代りに、相當の錢では報いられた風があるに反して、彼だけは本當に「踏まれたり蹴られたり」で、一人氣の毒な目に遭つたのは、それは十把一からけ、文學なその細かい所の殆ど分らないらしいあの批評家の目違ひで、彼がやつぱし非通俗の作家である所以だと僕は思ふのである。

遊蕩文學者
赤木桁平

だが、さて、先に話した近松秋江が、大阪の難波新地の、軒並に行燈の掛つたおちやや町（これは無論一流ではなくて三流以下の色町の一割である）の中に、ほつんと一軒挾まれて建つてゐる餘り綺麗でない旅館の一室で、僕を捉へて綿々と話した女の話は、所々その描寫が眞に迫る所もあつたが、（即、部分々々彼の好きなリアリズムの描寫になるのだが）その全體の印象は、前にも言つた通り、話手のはアはア喘ぐ呼吸を通して、彼の矢竹にはやる心持なり、情緒なりが感じられたゞけで、言ひ換へると聞き手をして、たゞ當てられ氣味を感じさせる流儀のものであつた。つまり、悪い方から言ふと、讀者諸君、彼の小説にもこれに似た感じがあるとは思はないか？

讀者諸君、さうだと言つて、決して彼をせめてはならない。彼の如く溺れるが故に、彼の如く上ツすべりしない、心ある讀者の肺腑を貫き、心なき讀者の顔をしかめさせるやうな小説は、正に逸品であつて、彼の外に決して他の追従を許さぬものではないか？

四

近松秋江は又、彼一流の見方でだが、當今稀に見る、文學と共に、女の鑑賞眼のすぐれた人である。(變なことを言ふやうだが、あゝ、方今、文學のよしあしの分らぬ人の多い如く、女の美醜を鑑賞する能力が何と人々に缺けてゐることだらう!) ところで、一つの病氣が彼にある。もつとも、彼からこの病氣をとつてしまふと、彼の藝術の面白味は大部分出なくなつてしまふのであるから、これは謂はゞドストイェフスキイの聖癲癡病の種類に編入すべきものであらうか? それは、早い話が、徳田といふ親代々の名を變へて、近松と名乗つてゐるのでも分るやうに、彼の「ものに溺れる」といふ性癖である。思へば、彼の生活も彼の藝術も、所詮この病氣を以て終始一貫されてゐる。まつたく、彼一家の味の細かい些か泣き且つ訴へ氣味の、しかし名文章を以て、綿々と盡きざる男女の戀の、而もその大部分は思ふやうにならない情思を述べた、彼の數多の小説は、水心ある讀者には眞に骨をゑぐるものがあり、溺れさせるに足るものがある。

けれども亦、ひるがへつて考へて見ると、天が下七千萬の民草の中には、此頃は殊に大勢は非秋江的で、或ひは民本主義に熱中してゐる者もあり、上品主義を信奉してゐる者もあり、實は誰も彼も腹の底のどこか一箇所位では秋江の心を心としてはゐるのだが、そこはどうも萬能の神様が造つた不思議な人間といふもので、嘗てそのやうなことがあつたか、未來にそんなことがあらうかにしても、現在そこを悩んでゐなければ、悲しい哉、彼の種類の小説を一笑に附してしまひたがる者である。

彼に「青草」といふ小説がある。五年前に愛妻に死なれて、言ふばかりなき悲嘆の日を送るさへあるに、更に薄情な交友關係に苛め抜かれた末、追はれるやうに旅に出た淺海といふ中年の文學者が、多年憧憬してゐた大阪に来て足を止めてゐるうちに、ふとその遊女に馴染を重ねて、「あゝ、自分にはまだ戀の出来る力が残つてゐた、」と人には包んでそれを獨りの心の奥深く楽しく祕めてゐた。或日、彼はその假住居をしてゐる大阪の郊外の旅宿の近くを散歩しながら、美しい春の自然を眺めて「あゝ、遊女に精神を奪はれてゐる間に、とう／＼折角の畿内の春をもしみ／＼見ずに過してしまつた」と感慨する。そしてこれは

秋江の少し用ひ過ぎる、餘り感心しない技巧だが、小説はさういふ主人公の散歩に書き起して、それから彼の思出に移つて、その遊女との過去の戀愛場に移る。(但、この「青草」といふ小説の中では、この作者の常套技巧が可成りうまく行つてゐる。)やがて主人公の浅海が宿に歸ると、その大阪の遊女から電話が掛つて來て、今夜遊びに行くこと知らして來る。(さて、これからが大變なのだ。)浅海は喜びに有頂天になつて、夕方電車の停留所まで女を迎ひに行く。

夜道を浅海が遊女と共に、びつたり寄り添つて自分の宿に連れて行く道で小溝の水が五六間のあひだ道の上に溢れてゐる所に來る。そこで浅海が遊女を負つてその水の上を渡るといふ所があるのだ。

遊女は黙つて、しなふ様な兩腕を靜つと背後から男の頤の下まで深く巻き着けた。浅海は柔かい温かい女の體温を感じた。頸筋の處に女の鬢の毛が非常な魅力を以つて微かに觸れた。

「おい、重い。小さいと思つて負つて見ると随分重い。……確乎捉へておいで。大きなお尻だから手が掛けられやしない。」

「嘘！ 大きいもんですか。」

「いや、大きいよ。これ、かうして私の手が巧く掛らないくらゐなもの。」

「大きかアなくつてよ。」

「いや、大きい〜。……そら！」

「は、あ！ 擦つたい。」

女は浅海の背上で身悶えした。

「もう厭や！」

「そら、もう降りるんだ。」

とこんな風である。秋江好みのリアリズムである。が、中々うまいものである。

そして二人は彼の宿について、喋々噂々の場宜しくあつて、その夜のうちに遊女が又歸

つて行くのを、淺海は電車の停留所まで送つて行く。(この次が最も注目に値するのだ。)

先刻の廣い草原まで出ると、

「ちよつと待つて頂戴。私い、此處に小用しづいをするわ。」

「ぢや、今自家でして來ればよかつたのに。」

「でも可笑しいわ。階下で屹度さう思ふもの。」

さういひつゝ、早くも闇の中に白い脛を卷くのが見えてゐた。

翌朝淺海は、また其處を散歩すると、昨夕遊女が、小用をした跡には青草が仲々と萌えてゐた。

これで小説は終つてゐる。「青草」一篇、決して悪い作とは思はないが、こゝに至ると、僕と雖も多少苦笑せざるを得ない。

今の若い者には、僕のやうな例外もあるが、やつぱりこの流儀の彼の小説の一章を暗誦するよりは、人道主義の小説の一節でも暗記して、絶叫する方が體裁もいいし、又彼等の好みでもある。同じ樂屋の中でも、「あれであの人の藝は中々……」などと賞めてゐる少數の者はあるのだが、全般に渡つて彼の小説の受けない所以である、一概に彼等の罪でもないのだ。

それに、彼は口ではいくらリアリズムを稱へてゐても、事實又彼の作品を見ると、流石にリアリズムの謳歌者だけの事はあると點頭かれるかむ節は十分あるが(彼がリアリズムの主張者憧憬者であるといふことは注意すべきことだ!)だが、ここではそれに就いて詳しく述べることを省く、大體に於いて彼の作は現すといふよりも、泣き且訴へる流儀に見える。言ひ換へると餘りに彼の作の大部分は一人稱であり過ぎる。餘りに片寄り過ぎてゐる。そこが、それで、彼は決して下手な作者ではないのだから、一部分の讀者を溺れさせるのだが、大部分の讀者を感じの上で困らせる所以なのだ。

しかし、それは、他人の好悪はさておいて、彼の長所であつても、決して短所ではない。

だから、その彼の溺れる性癖が、明らかに彼の藝術に災する少數の例外は別として僕一個の見方からすれば、或ひは彼の親兄弟や親類縁者は、此上そんな無暗なことを勧めておだてて貰つては困りますと言ふかも知れないが、文學者なる彼に僕は、今の今彼の病氣といつた、その病氣を益々助長して膏盲にまで入るやうに育くんで欲しいほどに思ふものである。が、そこ迄彼に最眞しても、最眞の出来ないのは、今言つたそれが明かに彼の藝術に災する場合である。

例へば、「四條河原」といふ彼の作である。東京の男が京都の遊女に惚れて、或時も東京から京都へわざわざ出かけて來てゐる。女も決して男を憎からず思つてゐる様子である。ところが、或日どうしたのか、而も前から約束してあつたにも拘らず、いくら掛けても、外の客の席に出てゐるとか、遠出をしてゐるとかいふ返事で女が來ない。その時の男のいら／＼する情景は、作者は身その境を十分經驗したゞけに、中々よく書いてある。そこでやつとのことで、おちややお上や女中と共に、男は策略をもつて女を呼び出して、女に

會つて、二人で四條河原を歩きながら、女の薄情を詰る。そして女の心變りを恨んで、いきなり橋の上で刃傷に及ぶといふのが、その作の荒筋である。

作者としては、薄情な女を恨む男の心持が、刃傷三昧にまで至るの、無理からぬことを書かうといふ意氣込があつたのかも知れないが、どうも僕には作者が無意識のうちにも、京都の茶屋町、京都の女、加茂川、さては「近頃河原の達引」お俊傳兵衛などといふ、詳しく言ふと、「……死に行く身の後髪、弾く三味線は祇園町、茶屋のやま衆が色酒に、亂れて遊ぶ騒ぎ合ひ、あの面白さを……」などといふのが好きでたまらない、そんな興味に引かされて、書いたものゝやうにしか思へないのである。

わざわざ下手な所を抜書するのも可笑しなものだが、その小説の最後――

「切れるも切れんもないやおまへんか」

「膠もなくいひ放つた彼女の顔はその時まざ／＼と冷笑を浮べてゐた。

「あゝさうか。さうだつたのか。」

沈痛な聲がして、そのまゝ黙りこんでゐたかと思ふと、忽ち暗の中にきらりと光るものがあつて、夜目には殊に白さの目立つ女の襟頸目がけて突刺した。

「あゝ人殺し」と女は一聲高く悲鳴をあげて叫んだ。

「おい靜かにしてくれ。私はお前を殺して、自分も一緒に死ぬんだ。死んでくれ。」

この次に四行ほどあつて、そして終つてゐるのである。それまでは唯普通に、男が遊女の心よからぬ仕打に苛々することが書いてあつて、而もそれとて彼の外の同じことを書いた主観小説よりも、割合に男の苛々しさは淡くしか出てゐないのに、それが突然この刃傷沙汰になるのである。つまり、彼のリアリズムが往々彼の「溺れる」性癖のために裏切られる一つの證據にもなりはしないか？

近頃、近松秋江は主として紀行文に筆を染めたり、芭蕉に就いての論文を書いたり、稀に小説を書いて「死んで行つた人々」(題名が多少違つてゐるかも知れないが、)などといふものを書いてゐる様である。それ等を僕はまだ残念ながら讀んでゐないのであるが、

察する所、彼も齡すでに不惑を過ぎて、我々の先祖の多くの人々のやうに、靜に過去の生涯をふり返り、人事から思を天然に寄せる底の人になりつゝあるのか？ 相當に短かくなかつた半生を、人の五人分も十人分も女に惱まされた彼は、今や一寸ひと息ついて、妻も子もなく、思ひ焦れる女を持たない日の、靜かな喜びを感じ、獨身の氣安さを味はつてゐるのであらうか？ 僕の考に依れば、別れて思ふのは親の恩、合うて面倒なのは夫婦の仲だ、彼も一時は妻に逃げられて、狂氣のやうに煩悶したやうであるが、それでも七年連れ添うてゐた夫婦だつたといふが、今となつて見れば、恩愛の未練も消えて、却つて獨身の平安な生活に沁々感謝の念が湧いてゐることだらう。そこで、

ゆくへさだめぬ雲水のく、月もろともに西へ行く、西行法師は家を出で、一所不住の法の身に、吉野の花やさらしなの、月も心のまにくくに、三十一文字の歌修業……
ときめ込んでゐるのか？

だが、僕等、彼の以前の小説の愛讀者から言ふと、年をとつてからも、御苦勞であるが、

目下凡庸主義の跋扈する大正文壇のために、又一つ彼の心を逃はすやうな女が現はれて、大いに不惑を過ぎた人の愛慾に對する悶々の情を、彼に依つて書いて見せてほしい、と望みたい氣もするのである。(愛慾といへば、常にさういふ言葉を口にし筆にする田山花袋の小説も結構ではあるが、彼の所謂平面描寫が、彼が常々論ずる域まで本當に達したならいざ知らず、どうも「鉛筆書き」などといふことを説明されて、産出の量を誇られるやうな有様では心細い、今のところ秋江の主觀小説に及ばない、と僕は思ふものである。)

さて、さう言つて秋江に望んで見たとて、彼の心持が先に言つたやうな状態になつてゐるなら、それは決して僕等第三者がそれはいけないといふ譯のものでもないし、彼の才分は無無論愛慾の外描けないと言ふやうな片寄つたものでもなささうだから、今度は心機一轉前の溺れる對稱を改めて、現在の心境を心ゆくばかり現して見せてくれるか?

もつとも、これは決して彼に突然起つた心持ではなく、今から既に七八年もまへに西行の論を書いたこともあるし、また四五年前に「墓域」といふ作があつた。それはグレイの詩

の中の「この村の先人永へに此處に眠る」といふ詩の句を誦しながら、彼が彼の郷里の墓域をさ迷うて、そこに眠つてゐる過去の人々を追想し、その人々の生きてゐた頃の、彼等のやはり現在の我々と少しも變りない、愛慾に惱める人生を描いて、この作者には稀な、落着いた、客觀的な描寫で、何處か無常感の漂うた小説であつた。着想も無論新しいものではなく、言葉も決して新しいものではないが、又彼獨特の一種の名文を以て、嘘ではない、(今の文學にこの「嘘ではない」といふことがどんなに缺乏してゐることだらう? 知つて嘘を吐く者の文學はまだしも取り所があるが、度し難いのはむきになつて、眞面目のもりで嘘を書いた小説だ)沁々した感想を盛つたものであつた。

元より男女の愛慾の悩みを、それも主觀的に描くのが、これ迄の彼の最も得意とする壇場であつたには違ひないが、彼には斯ういつた風の、(即ち最近の彼はこの「墓域」の系統を追ふものらしい、)他の一つの特徴があることを見逃してはならない。一つ二つの僕の讀んだところに依れば、この頃の彼の紀行文は又彼の得難き天分を披瀝したものである。……

思ふに、今や迷ふ女の種が盡きて、加ふるに人生の秋風に吹かれて、彼はそんな境地に入りつゝあるのか？

それもよし、それもよし。

近松秋江！

君の蹠踏たる姿を神樂坂に見ないことも久しい。思ふに、それが一ヶ月や二ヶ月なら知らぬこと、さう一年も二年も東京を離れて、君が京都に行つてゐるところを見ると、何か又君を引止める女性がそちらに出来たのではないか？

もしさうなら、僕は君のために遙に盃を挙げよう。僕は今も言つたやうに、君の優れた鑑賞眼を以てする論文や、君の味の細かい名文で綴られた紀行文や、靜な心持で、落着いて人事と天然とを眺めようとする、如何にも日本流の、趣の深い小説も、現代の日本の文壇に於いて十分存在の價值のあるものだといふことを、認めるに決して人後に落ちるもの

ではない。それ等の方面に於いても君の豊かな才分は、十分今の文壇に存在を主張することが出来る。が、くだけて言ふと、君にはやつぱり女とのいきさつを書いてほしい。

「別れた妻」のおすまさんも、「うつり香」の蠣殻町の私娼も、「仇なさけ」の大阪の遊女も、さては「夏姿」の鎌倉のお妾も、もう皆君には過去の人たちとなつてしまつて、君は今或ひは靜かに山水を樂んでゐるのであらうが、(その氣持は十分僕等にも分る)だが、

……私は、獨りであることの安易さを染々と味つてゐた。私はどんなに、平常思つてゐる女を持たないことに平靜なる悦びを感じてゐるか知れぬ——妻も子もなくして——

などと言はないで、(とは言ふもの)、僕も實生活に於いては實はその氣持に大賛成を表するものであるが、(文士などといふものは何といふ因果な商賣なのだらう、どうぞ又君の亂れ易い心をかき亂すやうな女が、君に現れることを僕は祈るのだ。

こんなことを言ふと、つまり好んで君の生活の亂れることを祈るのと同じだが、どうせこの世で文士などに生れて來るのは、先の世で餘り善因を積んでない報とでもあきらめる

のだ、或ひは又これを見ず轉藝者にでも比べようか、いやだ〜と言ひながら、つひその道に陥り込んで、さて辛い稼業の慰にいろの一つもこしらへようとすれば、生憎金のある男はいやな男だし、好いた男には金がなし、結局辛い稼ぎで得た金を、苦勞しい男に過ぎ込むといふのと同じだ。近松秋江！　どうか一つ掉尾の一苦勞をして、新しい情話を綴つてくれ給へ。情話といふと、すぐ下等な作品を連想して悪いが、そして實に君も二三年前少しばかり流行つた情話集の作者等の中に伍して、「舞鶴心中」などといふものを書いたが、僕のいふのはあれではない、僕の言ふのは「疑惑」や「仇なさけ」のやうなもの、あんなのを書いてほしいのだ。

そして近松秋江！

年の順で、君が僕より先に死んだら、「墓域」に依ると、君は西洋流の簡単な碑文が好きださうだから、氣に入らぬかも知れないが、僕がその碑文を書かうではないか？

「友達のために、藝術のために、そしてそして女のために、悩み多き一生を送りし人ここに眠る。」

如何？　そして又君の小説集の扉には、君の好きな高山樗牛の「吾人は現代を……」云々と言ふのに真似て、君の小説の中の、あの文句を引かう。

「女は何といふ人を魅する生物だらう」

さやうなら、近松秋江。妄言多罪。(八・七)

大正十一年六月十五日印刷
大正十一年六月二十日發行

文藝夜話

定價金壹圓八拾錢

著者 宇野浩二

發行者 東京市神田區淺神保町十番地 福岡益雄

印刷者 東京市牛込區早稻田鶴卷町四百三番地 谷口熊之助

印刷所 東京市牛込區早稻田鶴卷町四百三番地 金星堂印刷部

發行所 東京市神田區表神保町十 金星堂

電話神田 三八五三番
四八三一番
振替口座東京 三三二八番

金星堂

名作叢書

▼ 森田恒友氏裝幀

▼ ボケツト形新裝美本

▼ 定價各冊金五拾錢送料四錢

文藝の機運大に動くの時本叢書は破天荒の至廉なる定價を以て現文壇諸家の最も自信ある珠玉の名篇のみを提供せんが爲に生れたるものにして我が文藝の精粹を網羅す。即ち收むるところの小説及び戯曲は何れも現實の人生に徹して興味深く何人の胸にも強く強く響くと共に高朗の韻を永久の未來に傳ふ。あゝ誰か此叢書を読まずして日本の新藝術を知れりと言ふを得んや。

1・長篇小説 曠野の戀

愛慾の惱みを中心としたる代表的傑作也

田山花袋

2・創作選集 離るゝ心

最近の力作者にして「勝敗」「復讐」の二篇を添ふ

徳田秋聲

3・長篇小説	人さまざま	發表の當時世評噴々たりし名篇にして附録に「妹の縁談」あり	正宗 白鳥
4・戯曲選集	父 歸る	この名篇の他に「茅屋根」 「温泉場小景」等七篇を收む	菊池 寛
5・長篇小説	友と友の間	友と友との戀の三角關係を描寫したる代表的力作也	菊池 寛
6・長篇戯曲	牧場の兄弟	社會劇として上演されたる雄篇にして「地藏教由來」を添ふ	久米 正雄
7・創作選集	懶い春	代表的力作懶い春の他に「工廠裏にて」等數篇を收む	久米 正雄
8・長篇小説	邪 宗 門	藝術の包ひ最も高き近來の珠玉の名篇なり	芥川 龍之介
9・創作選集	銀二郎の片腕	名人の精粹を凝らせるものにして「父親」「箱根行」等を收む	里見 弴
10・長篇小説	彼女と青年	若き男女の強い戀物語にして全巻を貫く才筆を見よ	里見 弴

11・長篇戯曲	恐怖時代	深刻を極めし稀有の名脚本にして上演直に好評を博す	谷崎 潤一郎
12・長篇小説	童 甚	力作中一代に鳴る名篇にして附録に「鶴喉」を添ふ	谷崎 潤一郎
13・長篇小説	床	代表的傑作にして人生の全景を展開して深刻を極む	藤森 成吉
14・創作選集	鼠	好評の傑作にして「母」「雲雀」の玉篇を收めたる佳品也	藤森 成吉
15・創作選集	花と實と棘	從來の作品中より其精粹を抜きたる稀有の逸品也	佐藤 春夫
16・長篇戯曲	二週 間	現代劇の代表作にして附録に名曲「孔子の歸國」を添ふ	長與 善郎
17・創作選集	恭三の父	名作恭三の父の他に代表的作品三篇を收む	加能 作次郎
18・創作選集	祖 母	發表の當時世人を驚かした名篇にして他三篇を收む	加能 作次郎

19・戯曲 集水のおもて	代表的名篇のみを集めたる 他に類例なき脚本	久保田万太郎
20・長篇 小説九 月 懺	發表の當時噴々たる好評を 得たる名篇にして他一篇を 附す	久保田万太郎
21・長篇 小説或 女の犯罪	深刻と凄壯を併めたる傑作 にして「労働者誘拐」を收 む	江口 渙
22・長篇 小説屋 根裏の戀人	作風一轉機せる代表作にし て名作「あの頃の事」を附 す	宇野 浩二
23・長篇 戯曲津 村教授	上演されたる名脚本にして 他に「穴」の一幕切を添ふ	山本 有三
24・長篇 小説死 兒を抱いて	若き女の憐みを描きたる獨 特の優秀なる作品也	廣津 和郎
25・長篇 小説月 光 曲	ロマンチックなる名作にし て全巻を貫く眞情流露の筆 致を見よ	田中 純

以下續刊

506

138

終